

2. 患者発生状況

2. 1 概要

2. 1. 1 全数把握対象疾病

付表1-1、及び1-2に平成16年の全数把握対象疾病の患者数を示した。

年間報告患者数は、1類感染症は報告がなく、2類感染症はコレラ 5名(2名)*、細菌性赤痢 24名(13名)、腸チフス 5名(なし)、パラチフス 4名(5名)であった。国内感染と推定される報告は細菌性赤痢の2例であった。3類感染症の腸管出血性大腸菌感染症 171名(159名)であった。4類感染症はE型肝炎 1名(なし)、A型肝炎 6名(なし)、つつが虫病 1名(4名)、デング熱 1名(1名)、日本紅斑熱 2名(3名)、マラリア 5名(2名)、レジオネラ症 8名(2名)であった。5類感染症はアメーバ赤痢 23名(17名)、ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く) 26名(35名)、急性脳炎(ウエストナイル脳炎及び日本脳炎を除く) 4名(なし)、クロイツフェルト・ヤコブ病 10名(4名)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 4名(4名)、後天性免疫不全症候群 26名(20名)、ジアルジア症 5名(1名)、梅毒 20名(20名)、破傷風 2名(なし)であった。平成15年に患者発生があった4類感染症のオウム病(3名)、Q熱(2名)、及び、5類感染症のバンコマイシン耐性腸球菌感染症(1名)は、平成16年には報告がなかった。

* ()内は平成15年の患者数

2. 1. 2 定点把握対象疾病

表4に週報疾病別累積患者数を、表5に月報疾病別累積患者数を示す。

週報対象疾病のうち、インフルエンザ定点及び小児科定点対象疾病で患者数の多い疾病は、感染性胃腸炎 49,042人、インフルエンザ 31,577人、水痘 10,431人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 6,510人、流行性耳下腺炎 6,160人、手足口病 6,022人の順であった。これらの疾病について定点あたり患者数で昨年と比較すると、感染性胃腸炎 [324.59→383.14]*、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 [34.14→50.86]、手足口病 [41.85→47.05] は増加し、インフルエンザ [230.59→159.48]、流行性耳下腺炎 [64.92→48.13] は減少した。その他小児科定点対象疾病で定点あたり患者数が目立って増加した疾病はなかったが、伝染性紅斑 [9.38→15.32]、百日咳 [0.64→1.09]、麻しん [1.05→1.63] が増加し、ヘルパンギーナ [61.80→38.39] が減少した。平成15年11月より新たに対象疾病となったRSウイルス感染症の患者数は340人 [2.66] 報告された。眼科定点対象疾病では、例年と同様に流行性角結膜炎の患者数1,390人 [39.71] が多かった。基幹定点対象疾病は、無菌性髄膜炎の減少 [6.29→1.86] が目立った。成人麻しんは6人 [0.43] であった。

月報対象疾病のうち性感染症では、尖圭コンジローマ [3.87→5.78] は大きく増加し、淋菌感染症 [15.57→12.48] は減少した。性器クラミジア感染症 [28.87→28.70]、性器ヘルペスウイルス感染症 [5.85→6.09] の増減わずかであった。薬剤耐性菌感染症では、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 [31.36→33.36] はやや増加した。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 [7.43→5.00] は、平成13年に急増したが、その後は減少している。薬剤耐性緑膿菌感染症 [0.93→0.43] は平成14年以降減少している。

* □内は定点あたり患者数

表4 疾病別累積患者数（週報）

疾 病 名	患者数	定点あたり (H14)	患者数	定点あたり (H15)	患者数	定点あたり (H16)
インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）	28,196	142.40	45,657	230.59	31,577	159.48
RS ウ イ ル ス 感 染 症	-	-	75	0.59	340	2.66
咽 頭 結 膜 熱	726	5.67	2,293	17.91	2,248	17.56
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4,794	37.45	4,370	34.14	6,510	50.86
感 染 性 胃 腸 炎	47,209	368.82	41,547	324.59	49,042	383.14
水 痘	13,504	105.50	11,661	91.10	10,431	81.49
手 足 口 病	4,049	31.63	5,357	41.85	6,022	47.05
伝 染 性 紅 斑	2,641	20.63	1,201	9.38	1,961	15.32
突 発 性 発 し ん	5,562	43.45	5,130	40.08	4,964	38.78
百 日 咳	81	0.63	82	0.64	139	1.09
風 し ん	74	0.58	67	0.52	61	0.48
へ ル パ ン ギ ー ナ	4,651	36.34	7,911	61.80	4,914	38.39
麻しん（成人麻しんを除く）	242	1.89	135	1.05	209	1.63
流 行 性 耳 下 腺 炎	7,343	57.37	8,310	64.92	6,160	48.13
急 性 出 血 性 結 膜 炎	45	1.29	47	1.34	22	0.63
流 行 性 角 結 膜 炎	1,349	38.54	1,441	41.17	1,390	39.71
細 菌 性 髄 膜 炎	13	0.93	11	0.79	13	0.93
無 菌 性 髄 膜 炎	113	8.07	88	6.29	26	1.86
マ イ コ プ ラ ズ マ 肺 炎	111	7.93	81	5.79	55	3.93
クラミジア肺炎（オウム病を除く）	1	0.07	1	0.07	1	0.07
成 人 麻 し ん	6	0.43	0	0.00	6	0.43

表5 疾病別累積患者数（月報）

疾 病 名	患者数	定点あたり (H14)	患者数	定点あたり (H15)	患者数	定点あたり (H16)
性器クラミジア感染症	1,305	28.37	1,328	28.87	1,320	28.70
性器ヘルペスウイルス感染症	277	6.02	269	5.85	280	6.09
尖圭コンジローマ	187	4.07	178	3.87	266	5.78
淋 菌 感 染 症	588	12.78	716	15.57	574	12.48
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	554	39.57	439	31.36	467	33.36
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	211	15.07	104	7.43	70	5.00
薬 剤 耐 性 緑 膿 菌 感 染 症	17	1.21	13	0.93	6	0.43

2. 2 腸管出血性大腸菌感染症及び各定点把握対象疾病の動向

平成16年の感染症発生動向調査事業における週報および月報の患者情報を解析し、週（月）別患者数、年齢階級別患者数を求めた。また、STDで対象とした疾病に関しては全疾病の性別患者数を求めた。全数把握対象疾病については、患者数の報告の多い腸管出血性大腸菌感染症について週別患者数、年齢階級別患者数を求めた。ここで求めた統計表は付表として本誌の48～61ページに示している。以下に各疾病の動向を示す。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の年間患者数は171名であった。

19週(5月上旬)から36週(8月下旬)まで患者発生が多い状態が続いた。43～46週(10月下旬～11月中旬)にも再び増大した。それぞれ保育園での集団発生を1事例ずつ含んでいる。

検出された血清型はO157が76%、O26が21%、その他の血清型が3%であった。

年齢階級別患者発生割合は、0～9歳で全体の47%を占めた。

図3-1 腸管出血性大腸菌感染症の患者発生状況

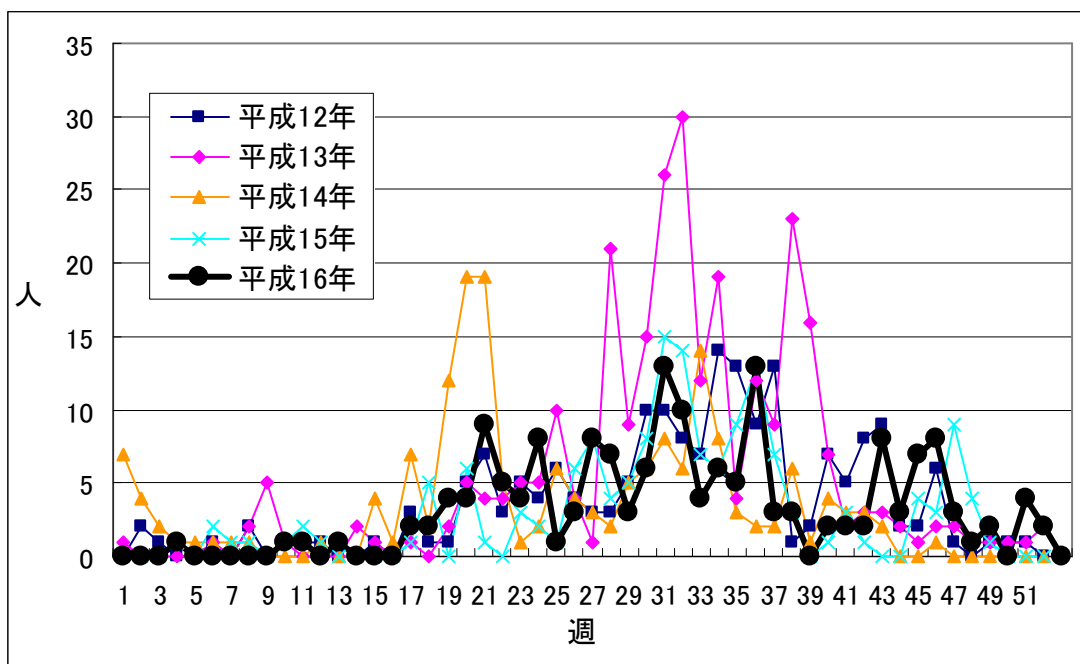
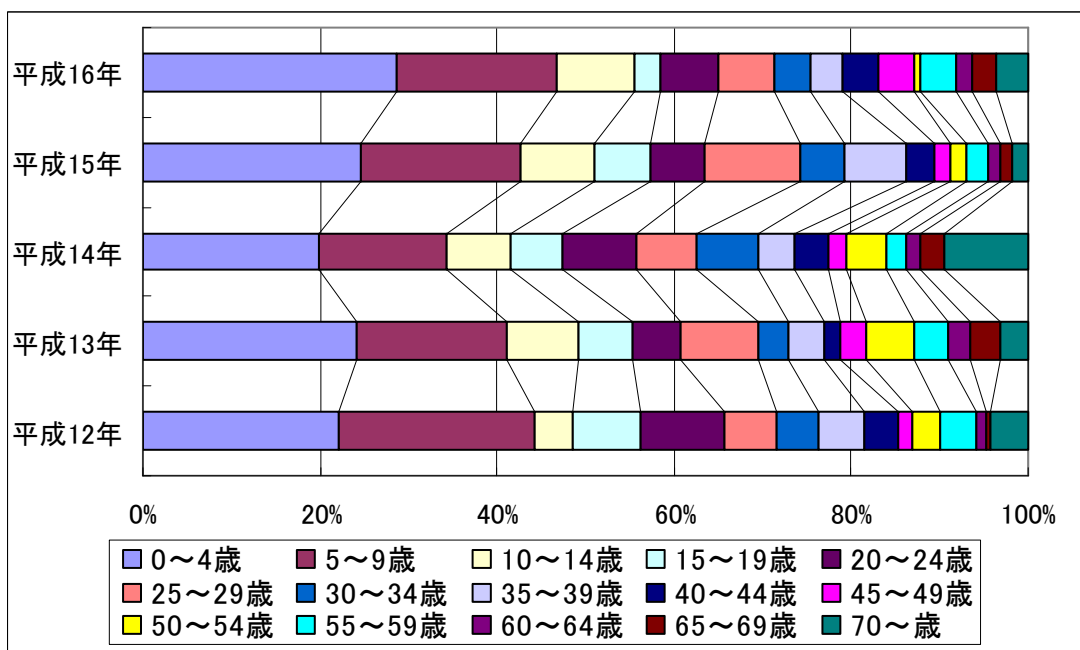


図3-2 腸管出血性大腸菌感染症の年齢階級別患者発生割合



(2) インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）

今シーズンのインフルエンザは第6週(2月上旬)にピークとなり、第14週(3月下旬)には終息した。

ウイルス分離はほとんどがA/香港型であった。

年齢階級別患者発生割合は、10歳以上の占める割合が47%と増加した。特に10～14歳および15～19歳の割合が高かった。

図4-1 インフルエンザの週別定点あたり患者発生状況

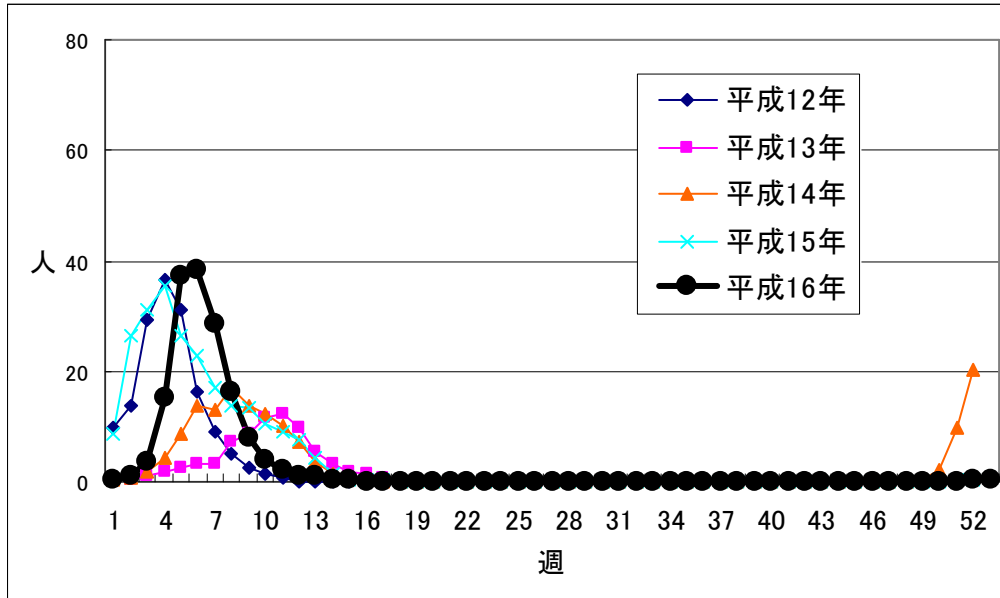
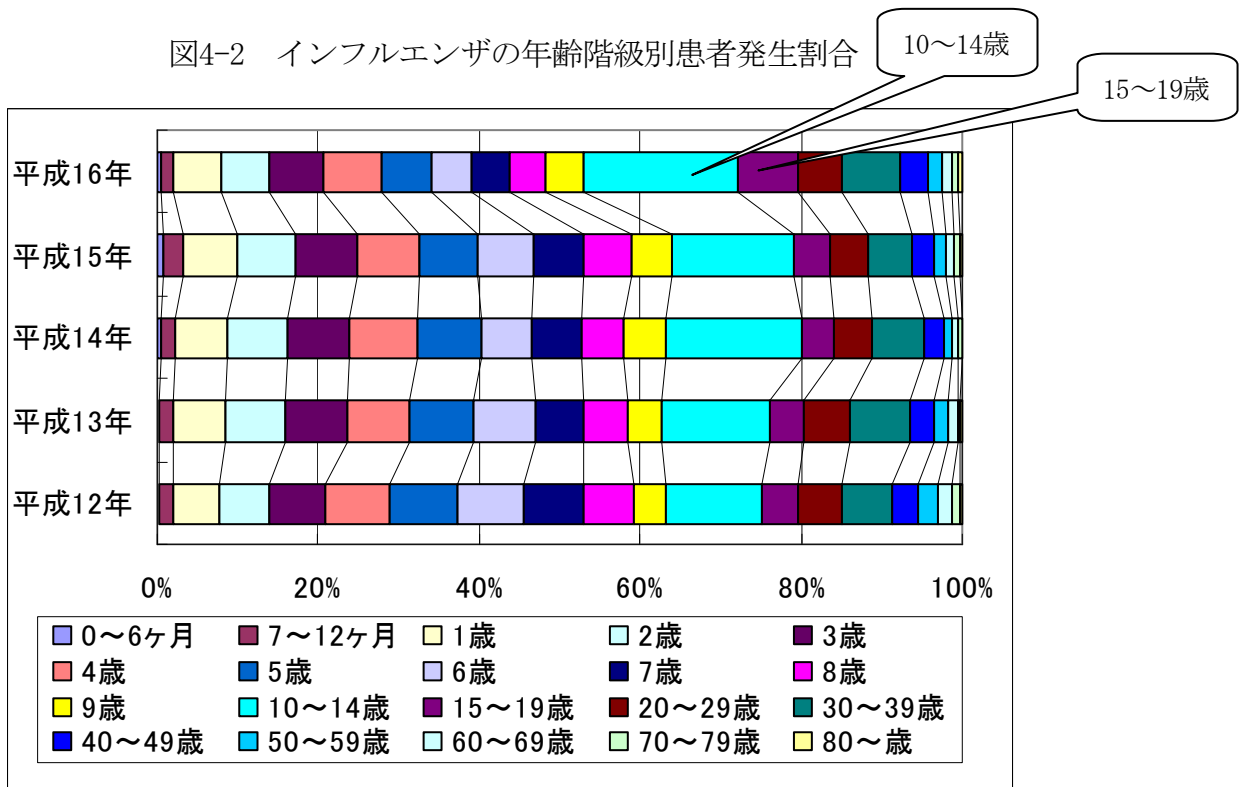


図4-2 インフルエンザの年齢階級別患者発生割合



(3) RSウイルス感染症

RSウイルス感染症は、平成15年11月5日の感染症法改正により小児科定点対象疾患に追加された。51週(12月中旬)以降患者数の増大があった。年齢階級別にみると、1歳以下で全体の70%を占めた。

図5-1 RSウイルス感染症の週別定点あたり患者発生状況

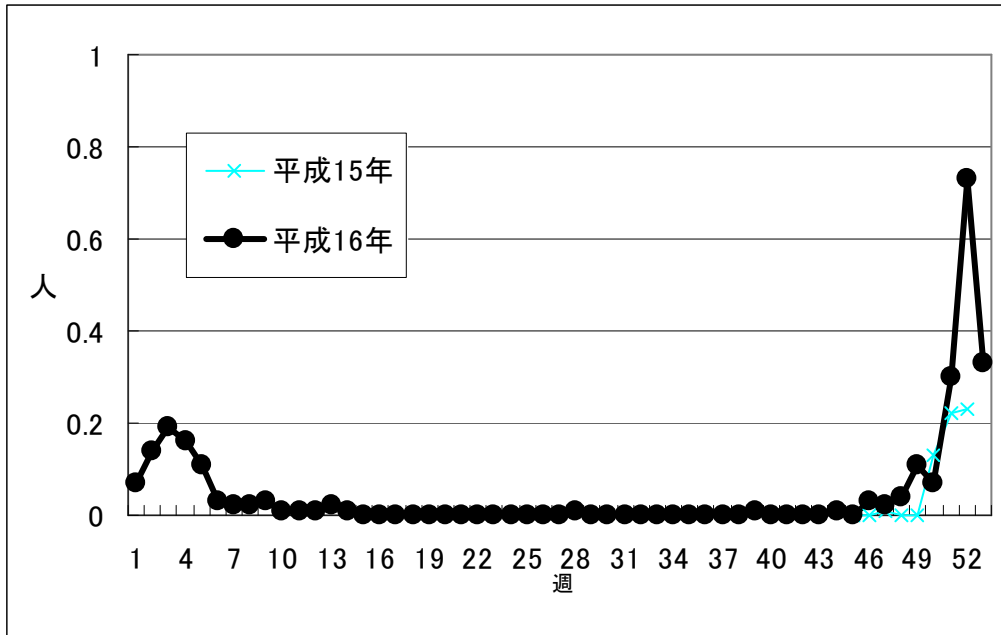
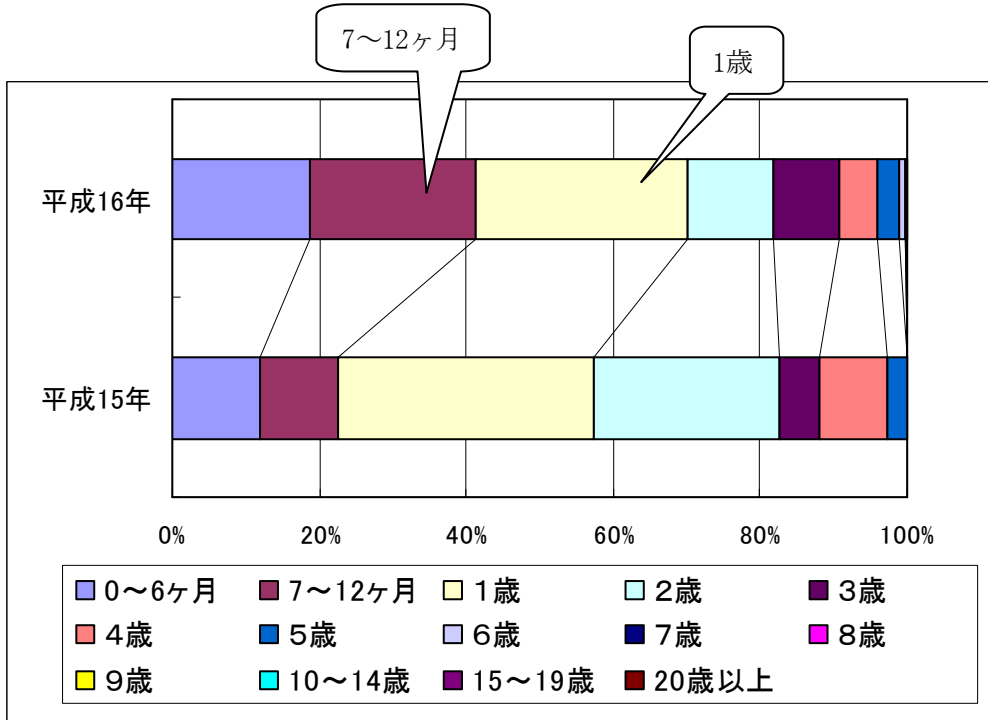


図5-2 RSウイルス感染症の年齢階級別患者発生割合



(4) 咽頭結膜熱

咽頭結膜熱の定点あたり患者数は、昭和62年以降最高となった昨年よりは微減したが、多い状態で続いている。18週(4月下旬)から増減しながら徐々に増加し、29週(7月中旬)にピークとなった。その後減少して例年並みになったが、40～41週(9月下旬～10月上旬)、49～53週(11月下旬～12月下旬)にも増加した。おもに夏季に流行する疾患であるが、夏季以外での報告数は増加傾向にある。

検出されたウイルスはアデノウイルス3型が主流であったが、同1型、2型も検出された。年齢階級別患者発生割合は、0～5歳で全体の77%、0～9歳では全体の96%を占めた。

図6-1 咽頭結膜熱の週別定点あたり患者発生状況

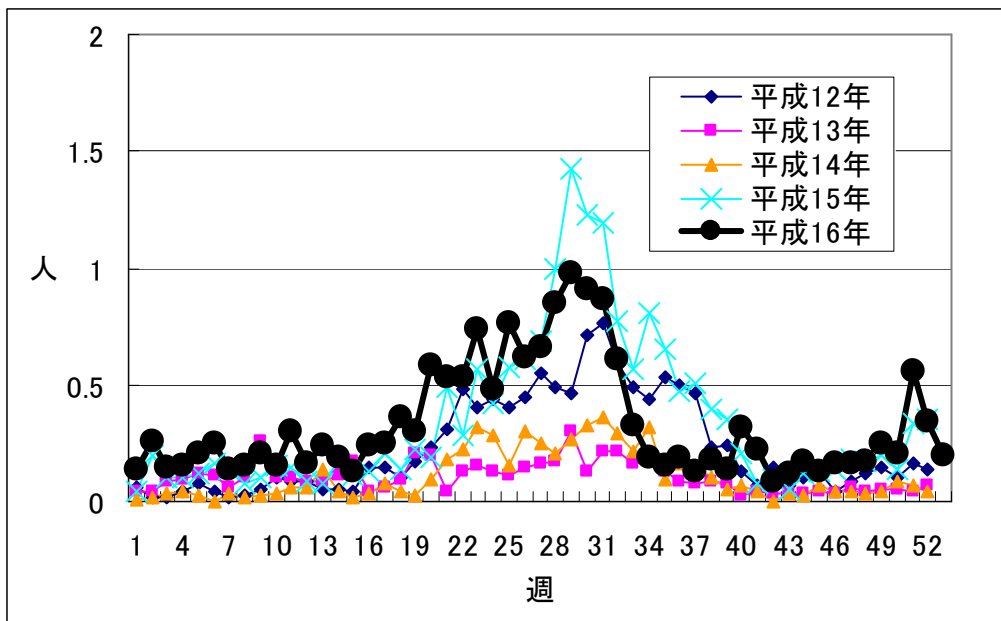
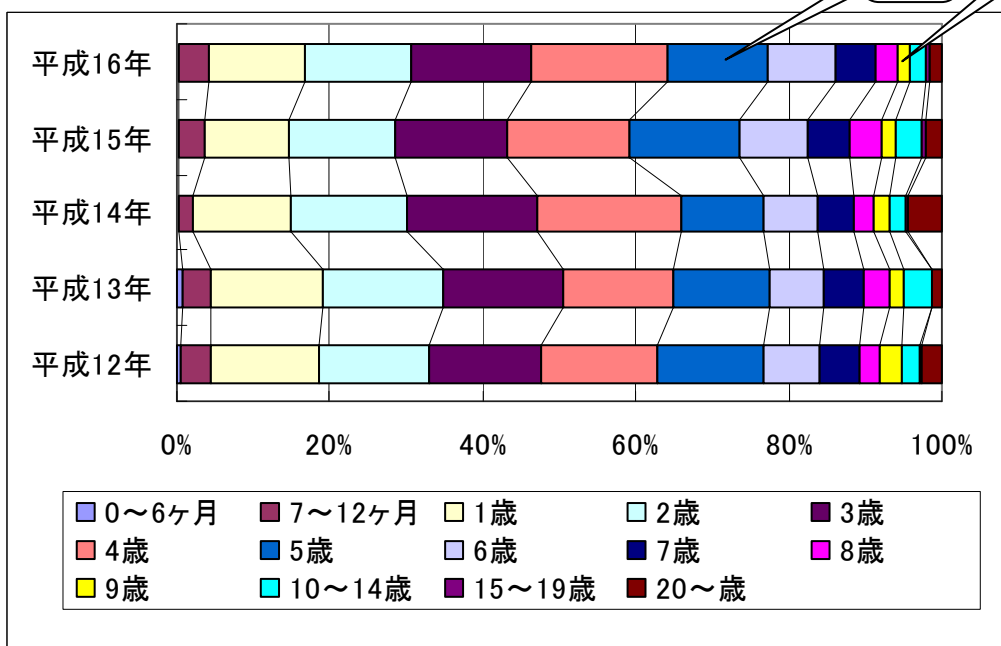


図6-2 咽頭結膜熱の年齢階級別患者発生割合



(5) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、年間の定点あたり患者数が平成11年以降徐々に減少していたが、平成16年は急増して50.86人と過去5年間で最多となった。

季節変動は30～42週(7月下旬～10月中旬)に患者数が減少したが、例年の同時期と比較すると多い状態であった。

年齢階級別患者発生割合は、1歳、2歳がやや増加した程度で大きな変動はなかった。1～9歳で全体の87%を占めた。

図7-1 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別定点あたり患者発生状況

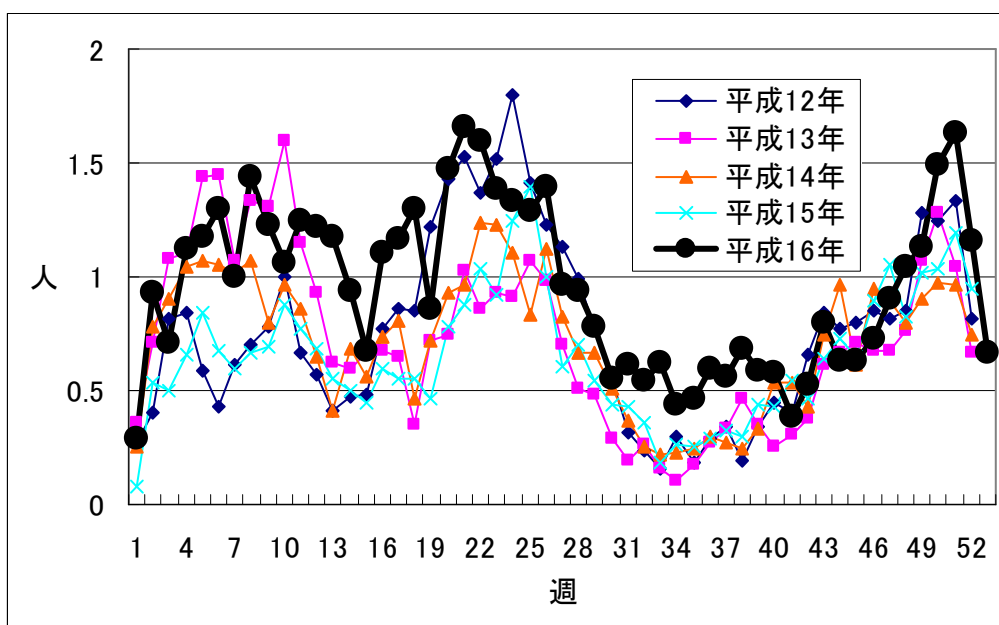
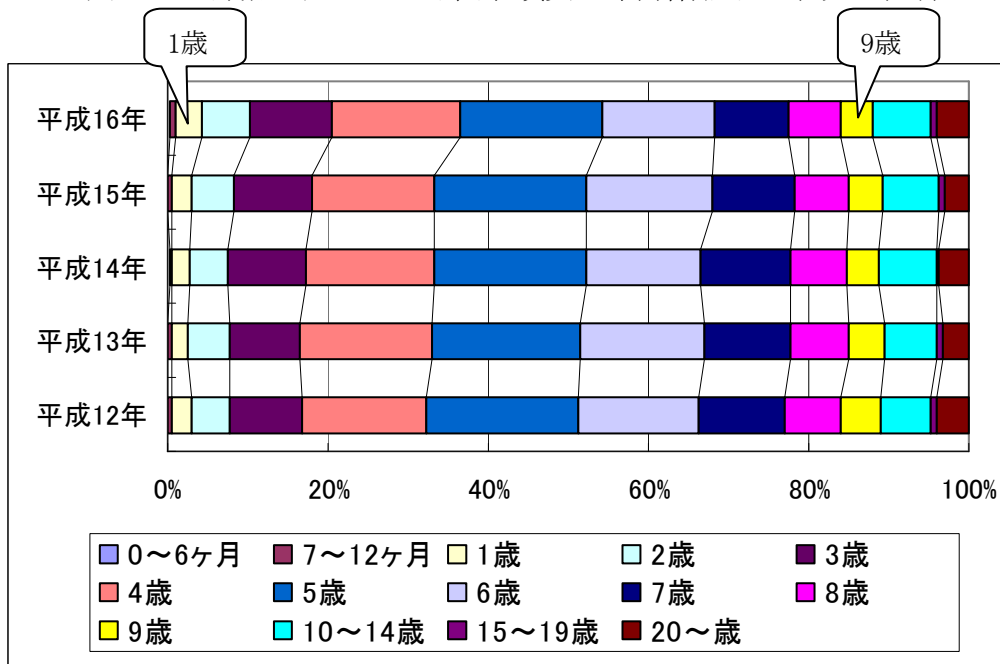


図7-2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢階級別患者発生割合



(6) 感染性胃腸炎

感染性胃腸炎の年間定点あたり患者数は、383.14人と過去5年間で最高となった。

季節変動は、2～5週(1月上旬～1月下旬)にかけて例年より多い状態となった。

年齢階級別患者発生割合は例年と大きな変化はみられず、0～5歳で全体の64%を占めた。

図8-1 感染性胃腸炎の週別定点あたり患者発生状況

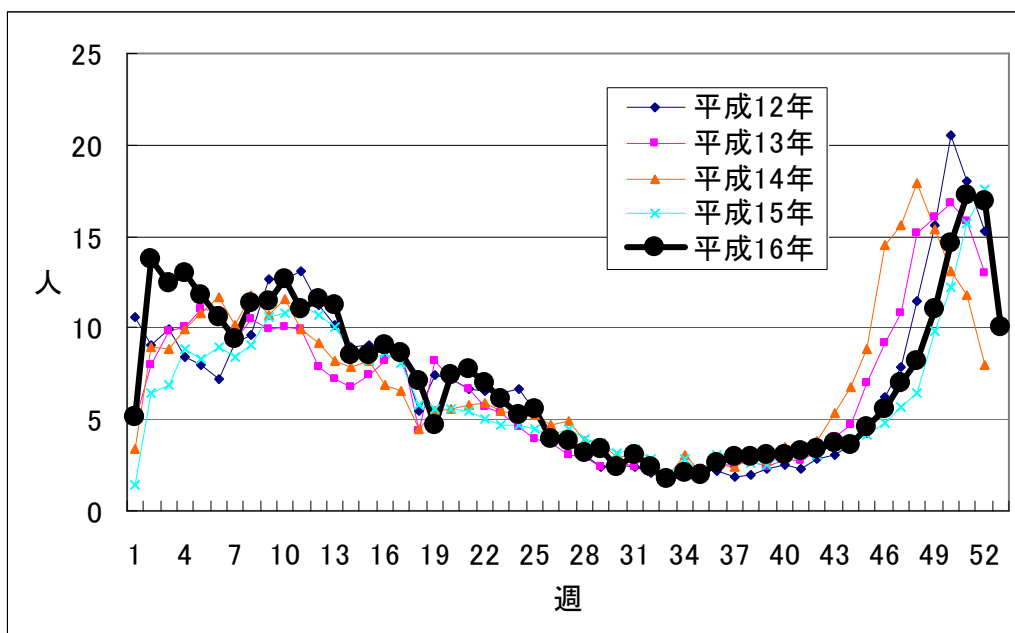
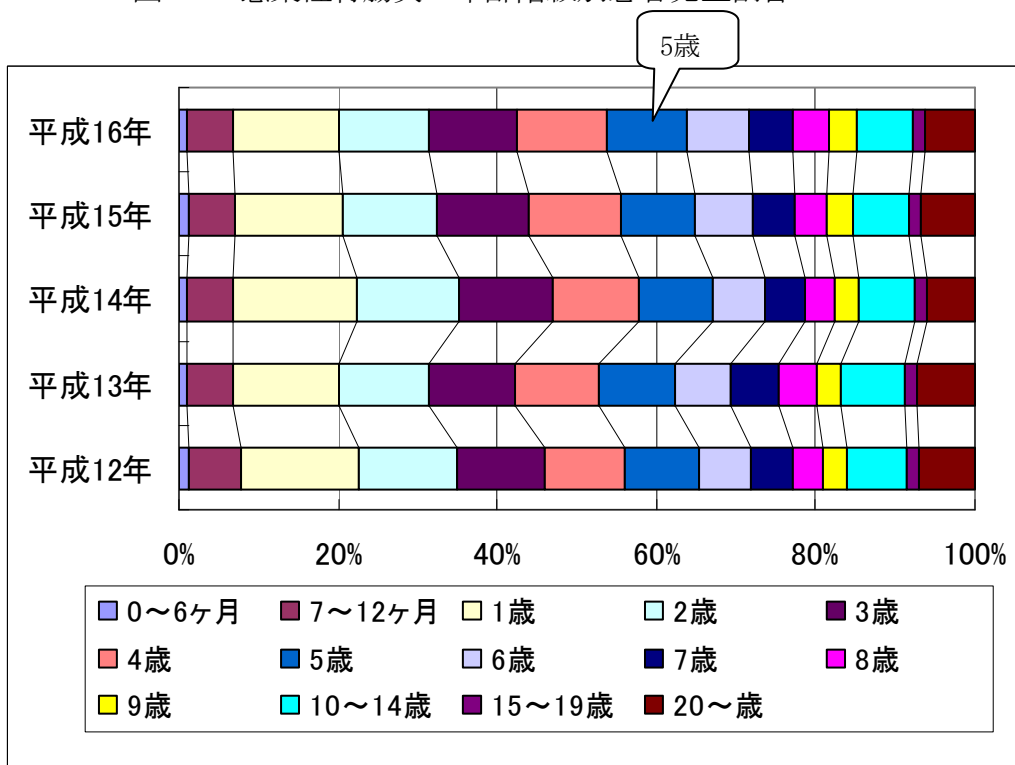


図8-2 感染性胃腸炎の年齢階級別患者発生割合



(7) 水痘

水痘は、毎年同程度の患者が発生しているが徐々に減少傾向にある。

本年の患者発生状況は2週(1月上旬)に急増したが、その後は例年と同程度か少なめの状態で推移した。

年齢階級別患者発生割合は、例年と大きな差はみられず0～5歳で全体の86%を占めた。

図9-1 水痘の週別定点あたり患者発生状況

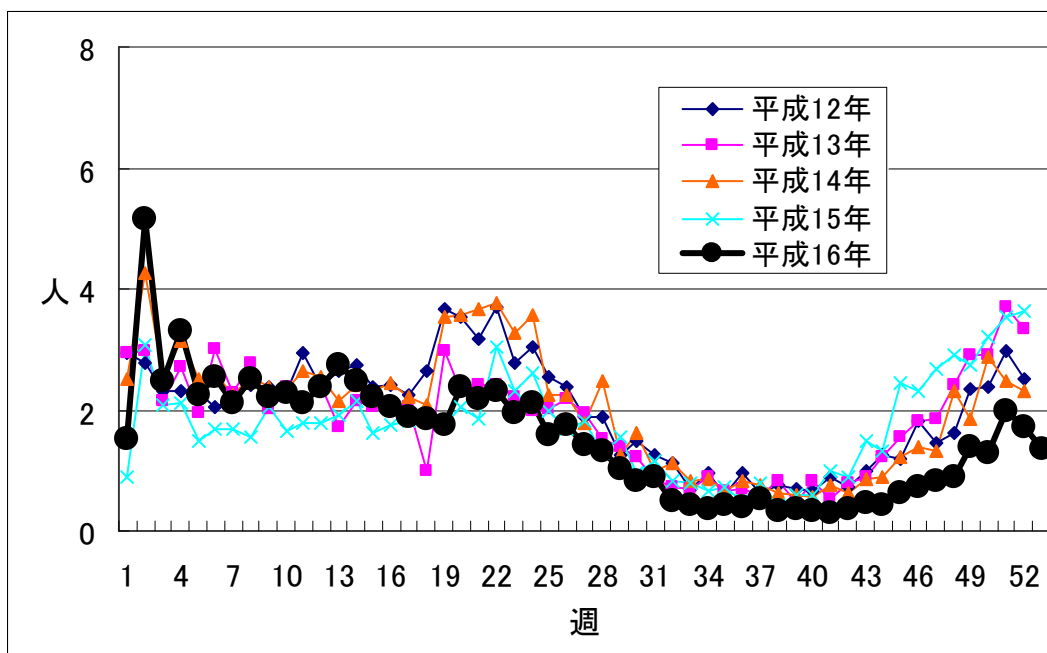
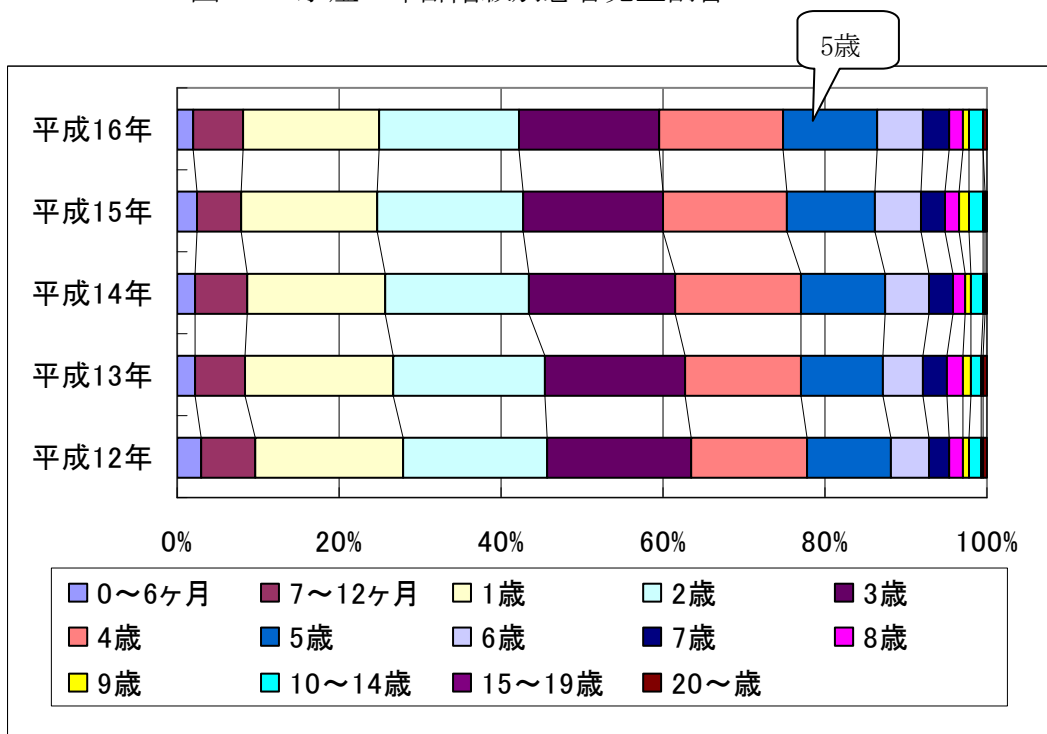


図9-2 水痘の年齢階級別患者発生割合



(8) 手足口病

手足口病の定点あたり患者数は、平成14年以降徐々に増加してきている。

季節変動は17週(4月下旬)から患者数の増加が始まり、29週(7月中旬)にピークとなって、その後は順調に減少した。

ウイルスはコクサッキーウイルスA16が検出された。

年齢階級別患者発生割合は大きな変化はなく1～4歳で全体の71%、0～9歳で98%を占めた。

図10-1 手足口病の週別定点あたり患者発生状況

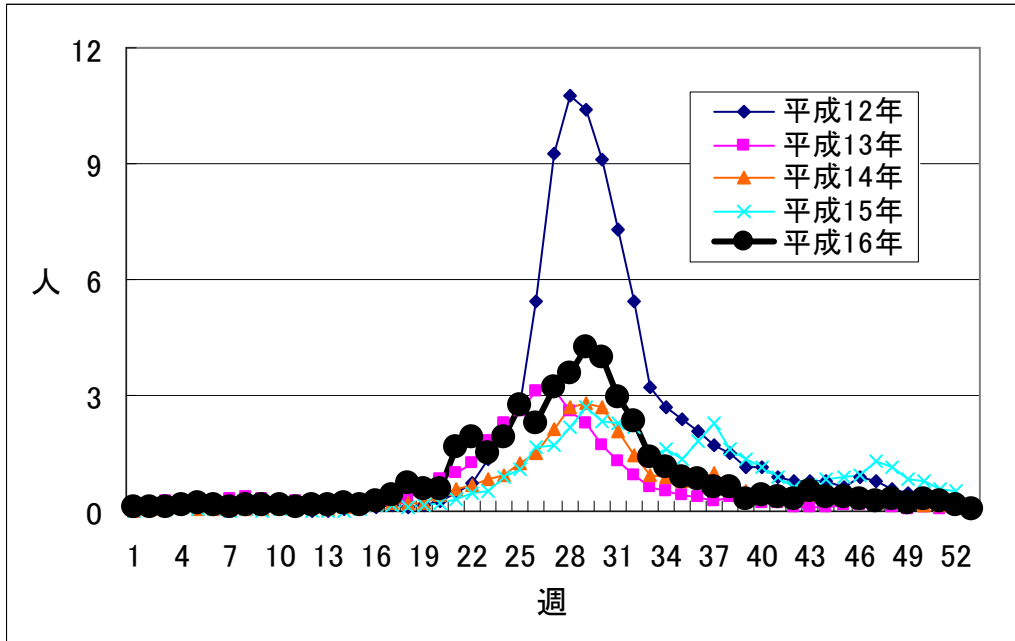
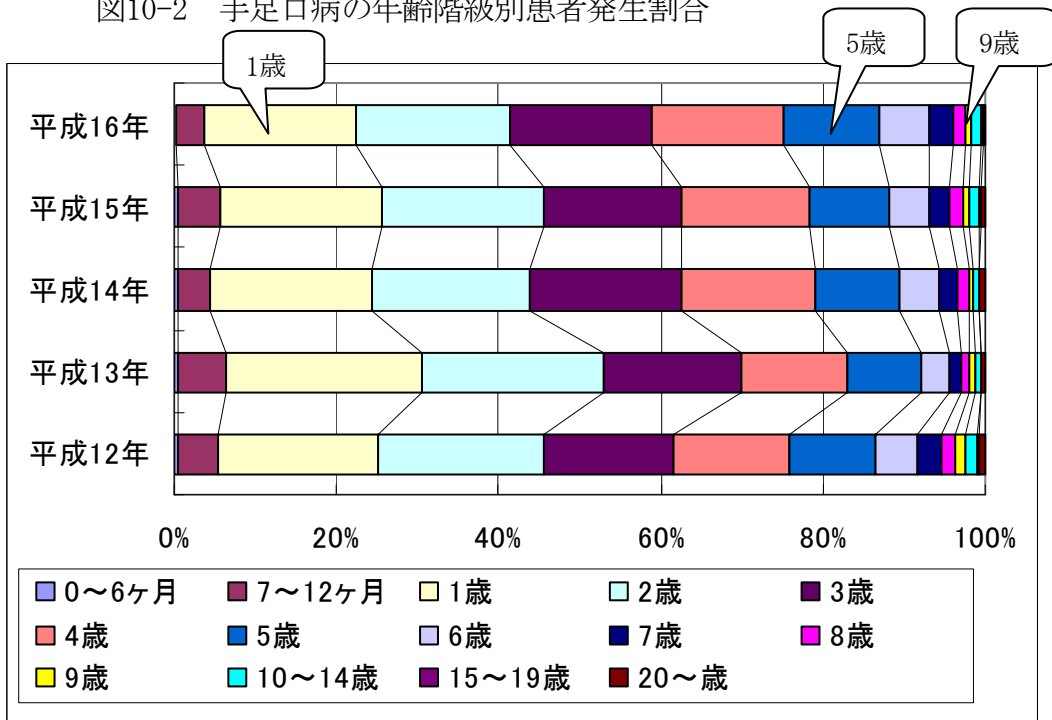


図10-2 手足口病の年齢階級別患者発生割合



(9) 伝染性紅斑

伝染性紅斑の定点あたり患者数は、昨年は減少していたが本年は増加した。特に大きな季節変動はなかったが、2～29週（1月上旬～7月中旬）における患者発生が多い傾向にあった。

年齢階級別患者発生割合は、0～9歳で92%を占めた。

図11-1 伝染性紅斑の週別定点あたり患者発生状況

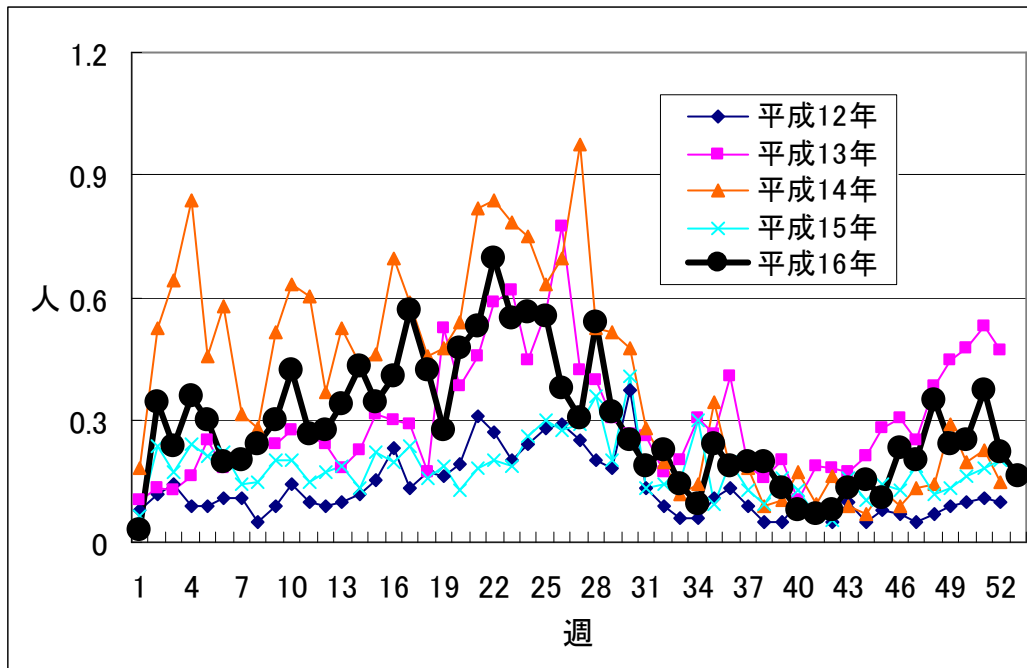
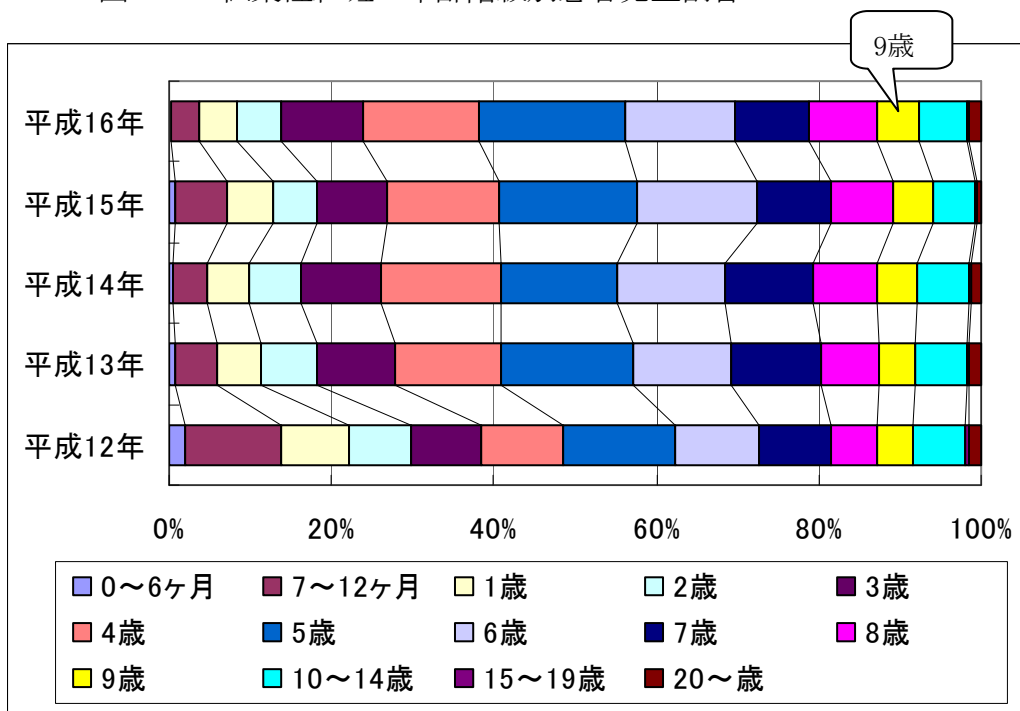


図11-2 伝染性紅斑の年齢階級別患者発生割合



(10) 突発性発疹

突発性発疹は通年患者の発生がみられ、かつ季節性のない疾病である。例年同程度の定点あたり患者数が報告されている。平成12年以降は微減の状態が続いている。

年齢階級別患者発生割合は、昭和62年以降0歳の患者が全体のほとんどを占めていたが、平成9年から年々0歳の割合が減少して、1歳の割合が増加してきている。平成16年は1歳が30%を占めた。

図12-1 突発性発疹の週別定点あたり患者発生状況

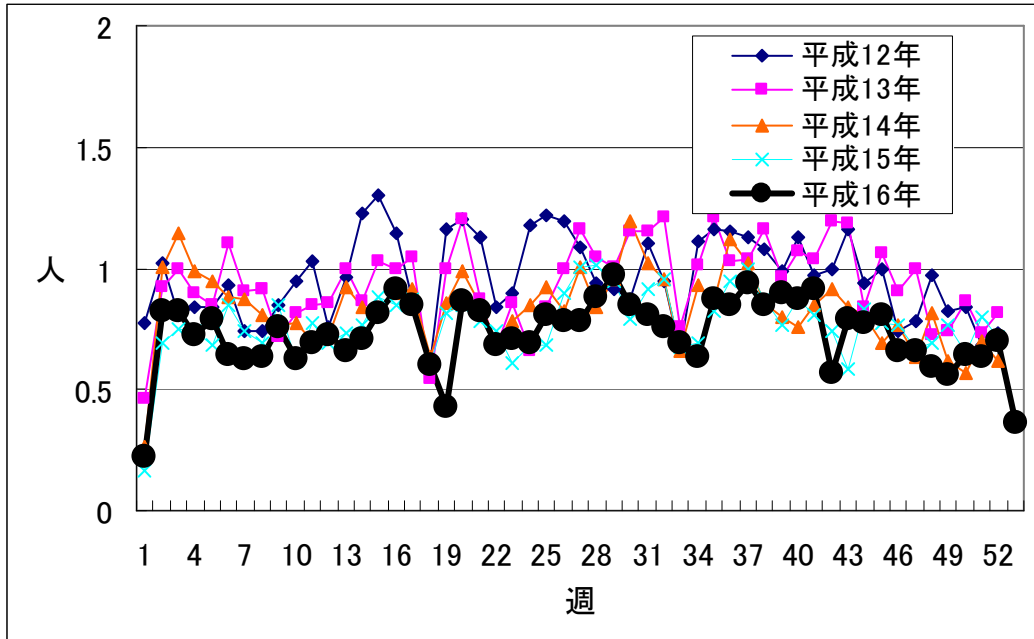
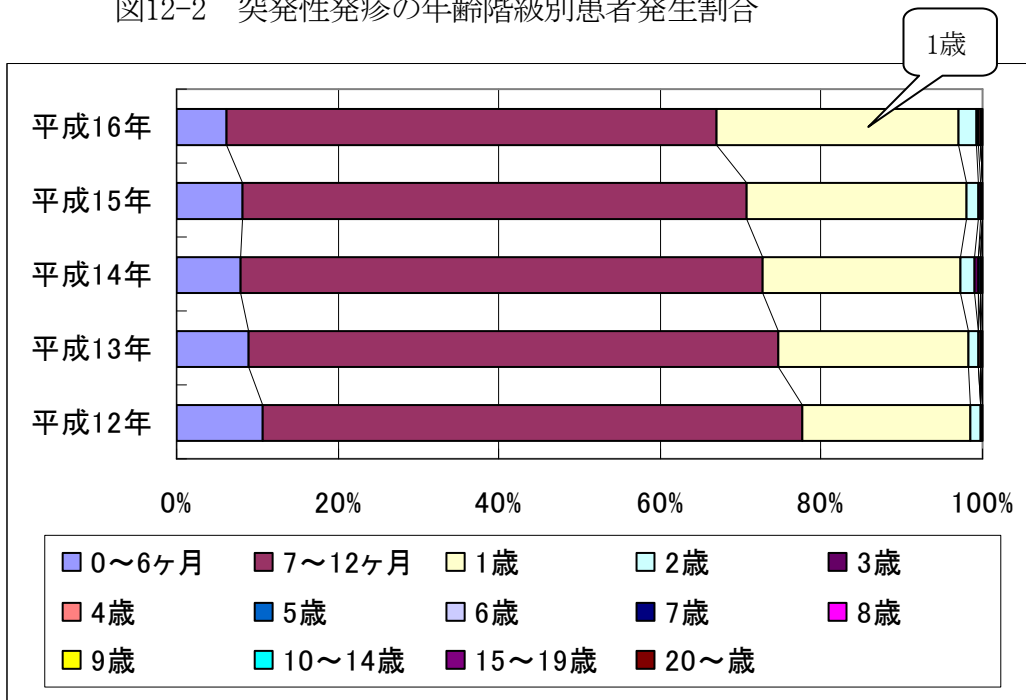


図12-2 突発性発疹の年齢階級別患者発生割合



(11) 百日咳

百日咳の年間患者発生状況は、平成12年は214人、以降毎年80人前後であったが、本年は139人と増加した。

年齢階級別患者発生割合は、6ヶ月以下が24%と増加した。0～5歳の割合は84%で、例年と大きな違いはなかった。

図13-1 百日咳の週別定点あたり患者発生状況

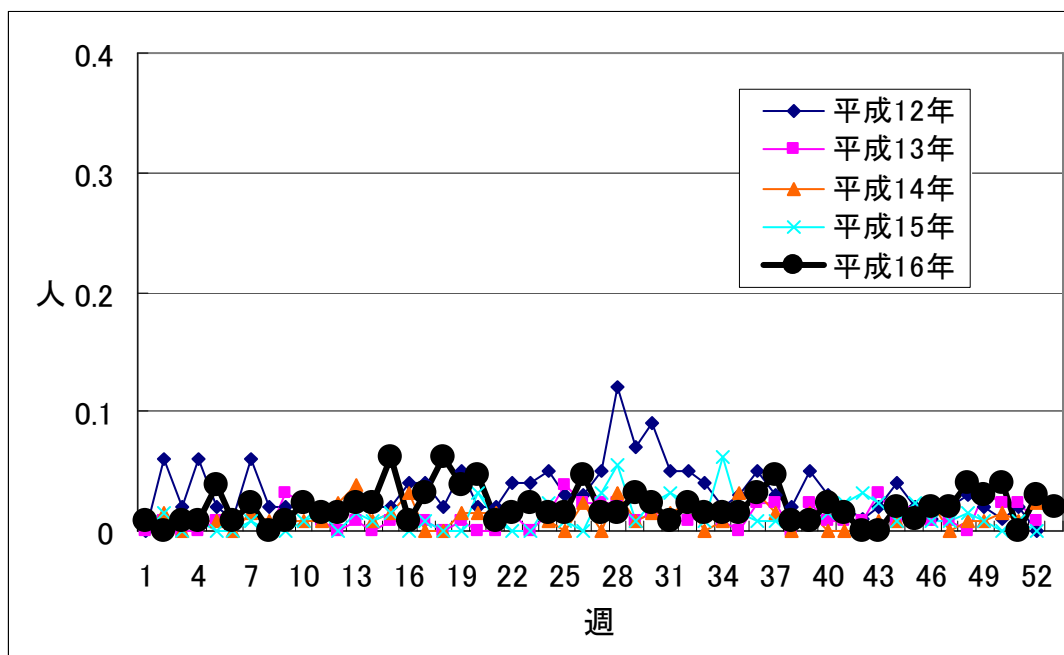
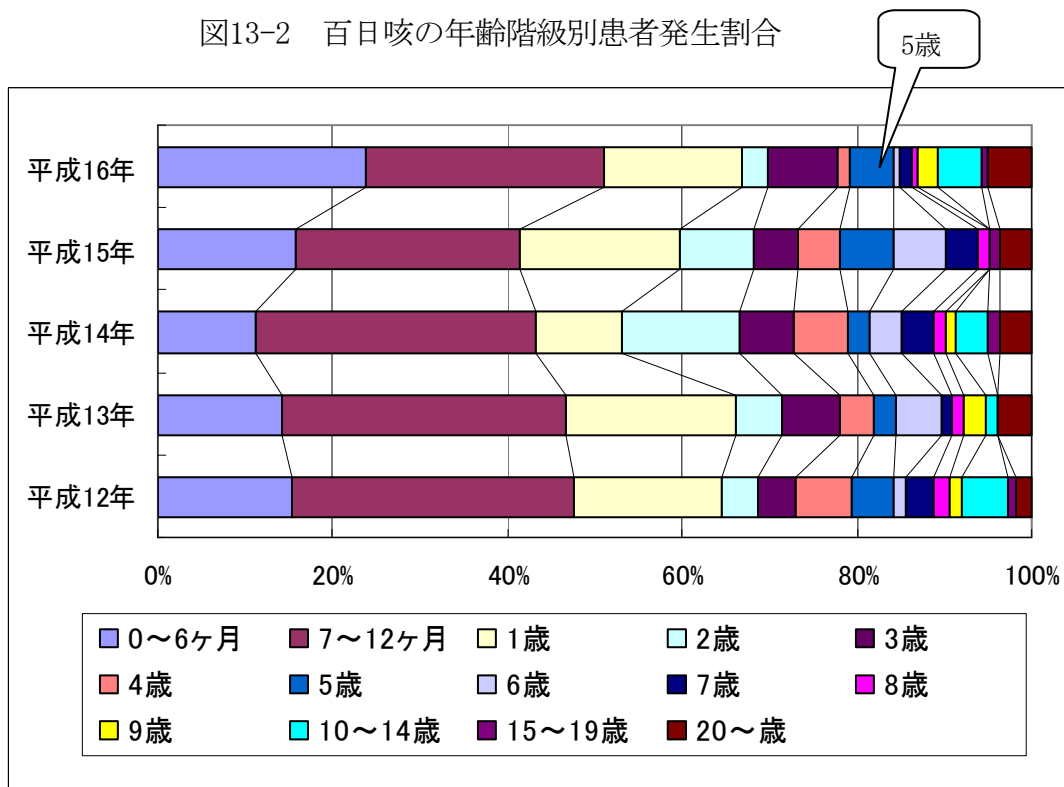


図13-2 百日咳の年齢階級別患者発生割合



(12) 風しん

風しんの定点あたり患者数は、過去5年間で最小となった。

季節変動は、11～27週(3月中旬～7月初旬)の発生がやや多かった。

年齢階級別患者発生割合は、0～9歳で全体の77%、10歳以上で23%を占め、10歳以上の占める割合が徐々に増加してきている。

図14-1 風しんの週別定点あたり患者発生状況

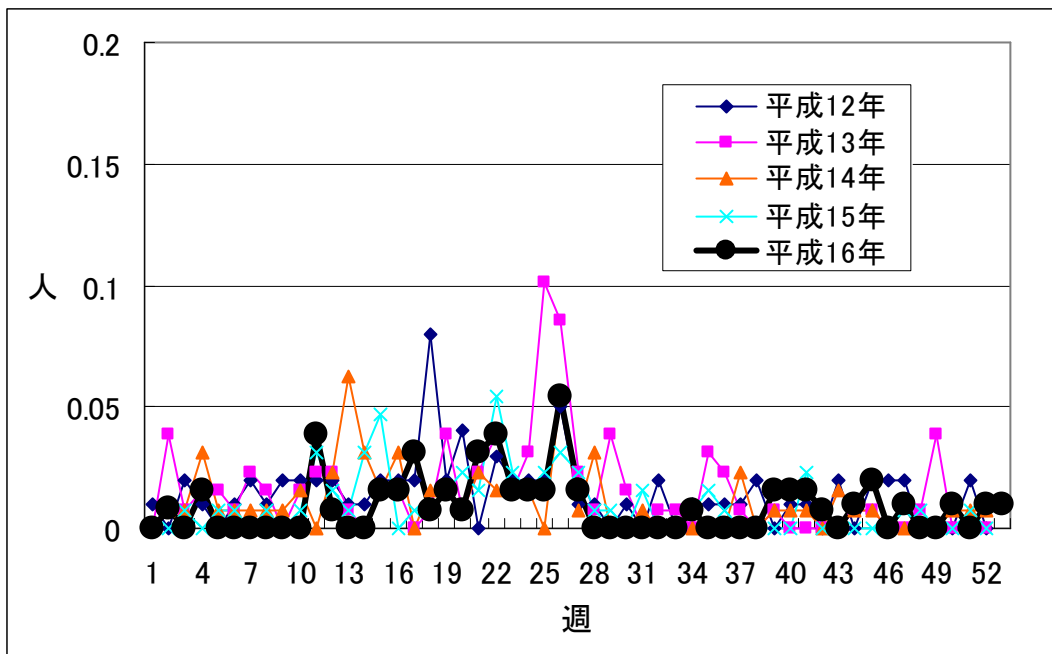
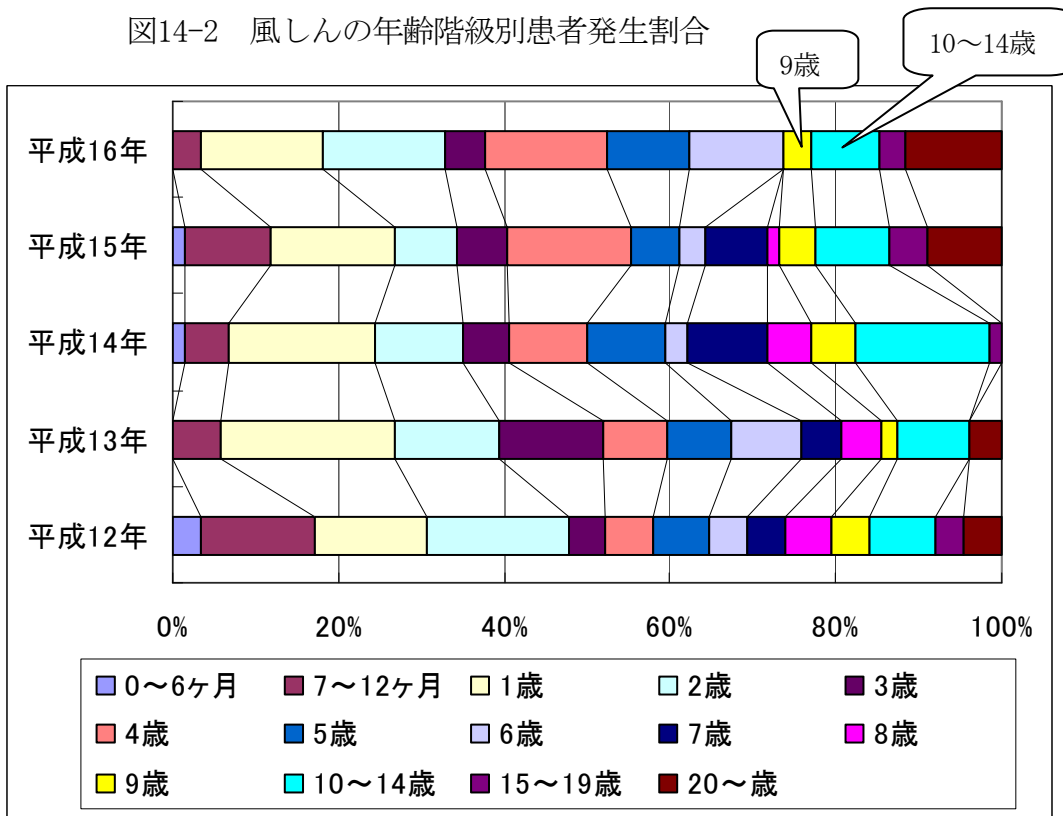


図14-2 風しんの年齢階級別患者発生割合



(13) ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナの定点あたり患者数は本年は減少した。毎年増減を繰り返している。

季節的には21週（5月中旬）から増加を始め、ピークは25週（6月上中旬）と28週（7月上旬）の2峰性になった。

ウイルスはコクサッキーウイルスA4が検出された。

年齢階級別患者発生割合は大きな変化はないが、0～5歳で90%を占めた。

図15-1 ヘルパンギーナの週別定点あたり患者発生状況

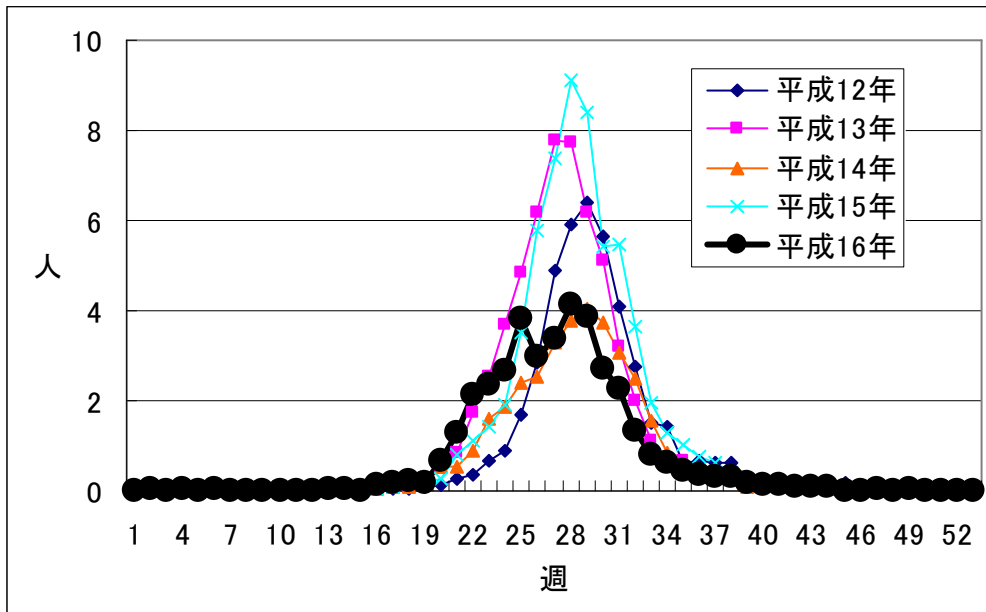
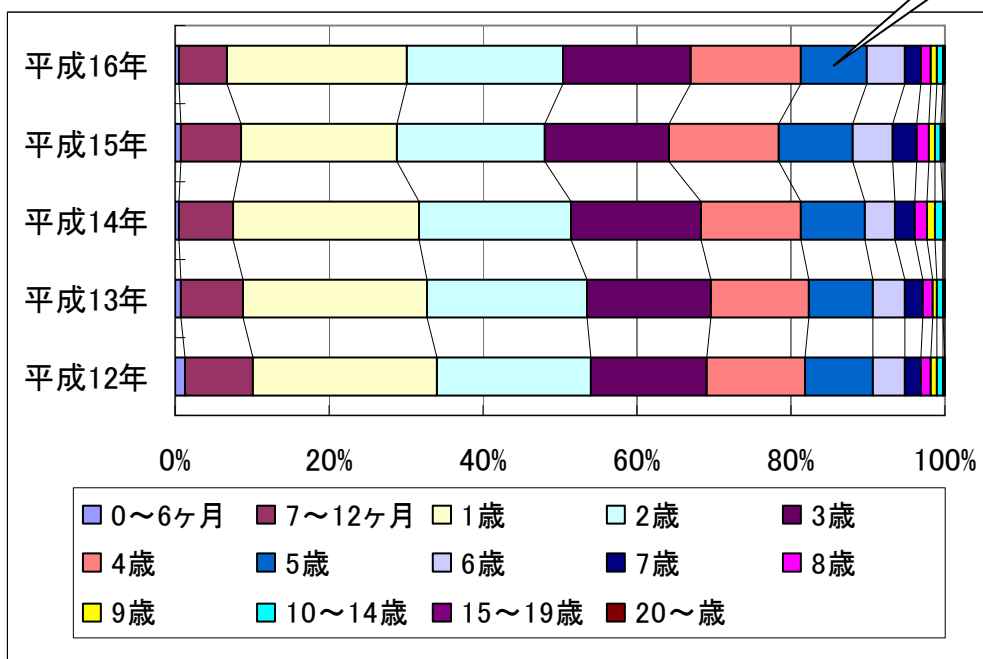


図15-2 ヘルパンギーナの年齢階級別患者発生割合



(14) 麻しん（成人麻しんを除く）

麻しんの患者数は昨年より増加した。

年齢階級別患者発生割合は、1歳以下で35%を占めた。10歳以上の発生は15%あった。

図16-1 麻しん（成人麻しんを除く）の週別定点あたり患者発生状況

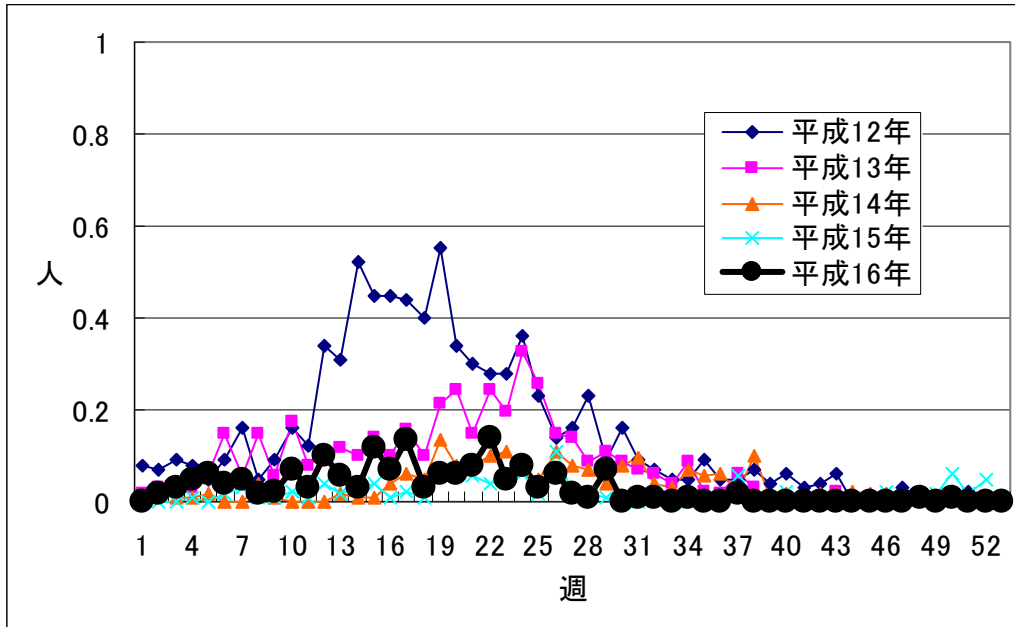
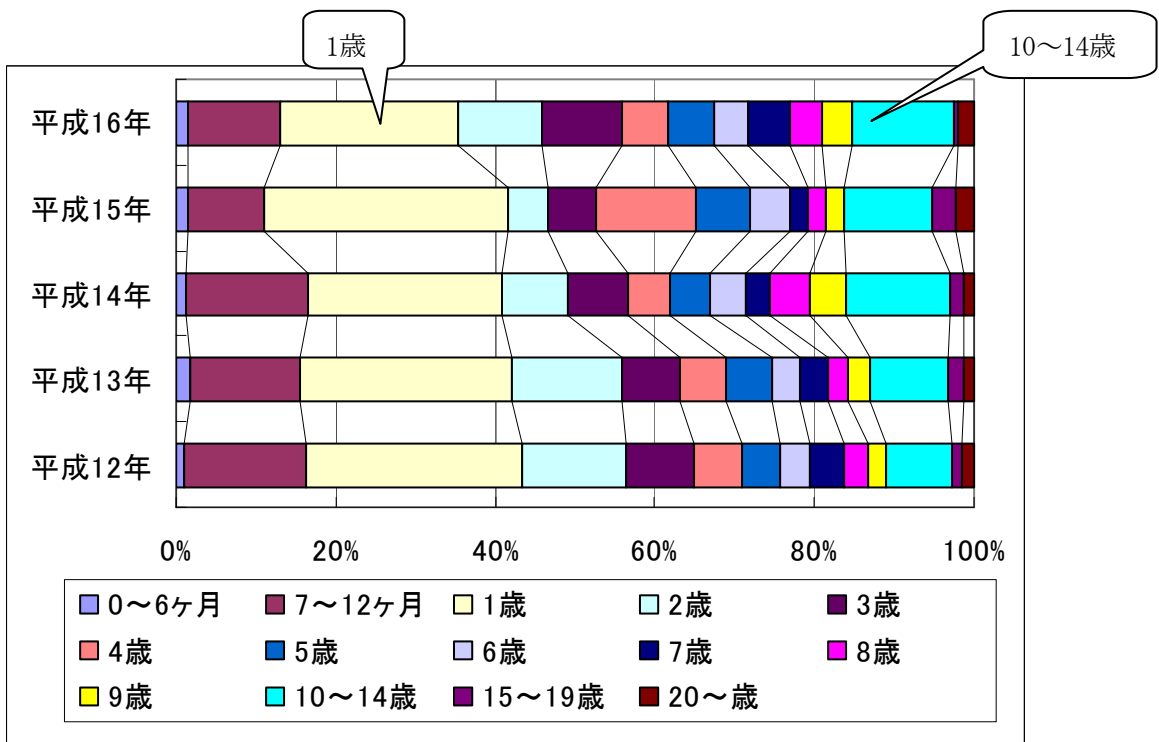


図16-2 麻しん（成人麻しんを除く）の年齢階級別患者発生割合



(15) 流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎の定点あたり患者数は昨年より減少した。

特に大きな季節変動はみられなかった。

年齢階級別患者発生割合は例年とほぼ同じで、1～9歳の患者が全体の92%を占めた。

図17-1 流行性耳下腺炎の週別定点あたり患者発生状況

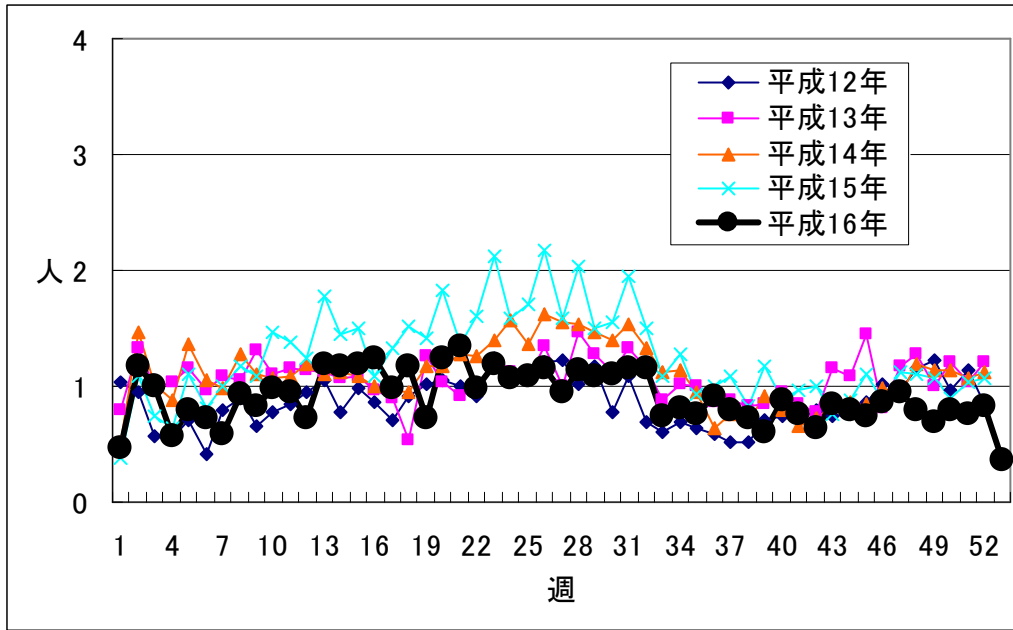
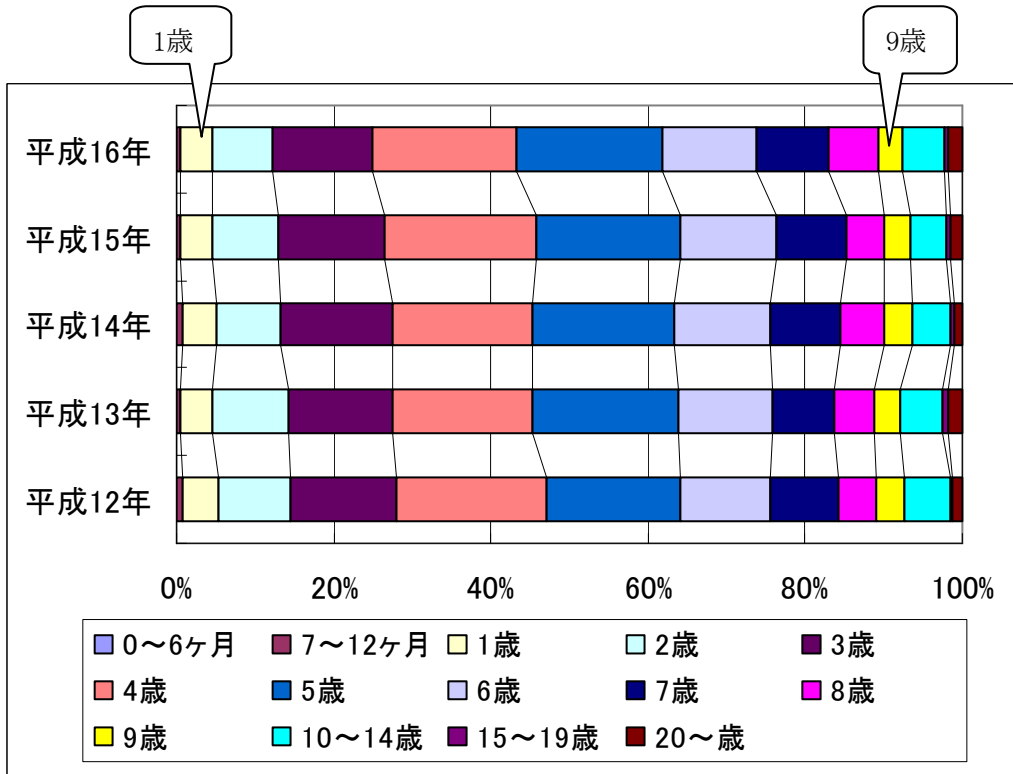


図17-2 流行性耳下腺炎の年齢階級別患者発生割合



(16) 急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎の患者数は平成12年以降減少し、平成16年は昨年の約半分となった。季節変動は特にみられなかった。

年齢階級別患者発生割合に関しては、2歳で1例の発生を除いて15歳以上であった。

図18-1 急性出血性結膜炎の週別定点あたり患者発生状況

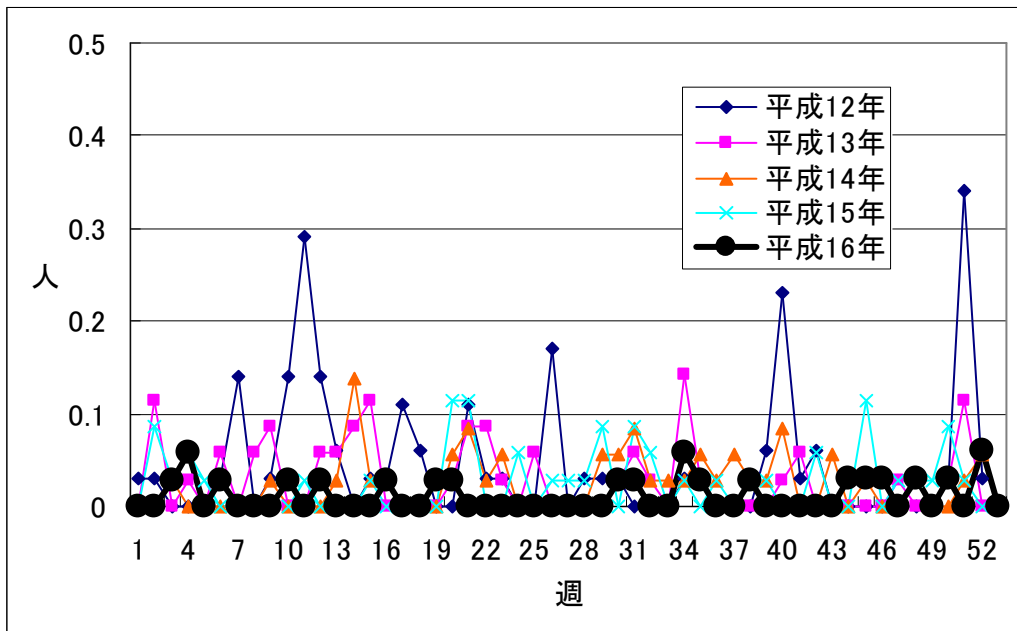
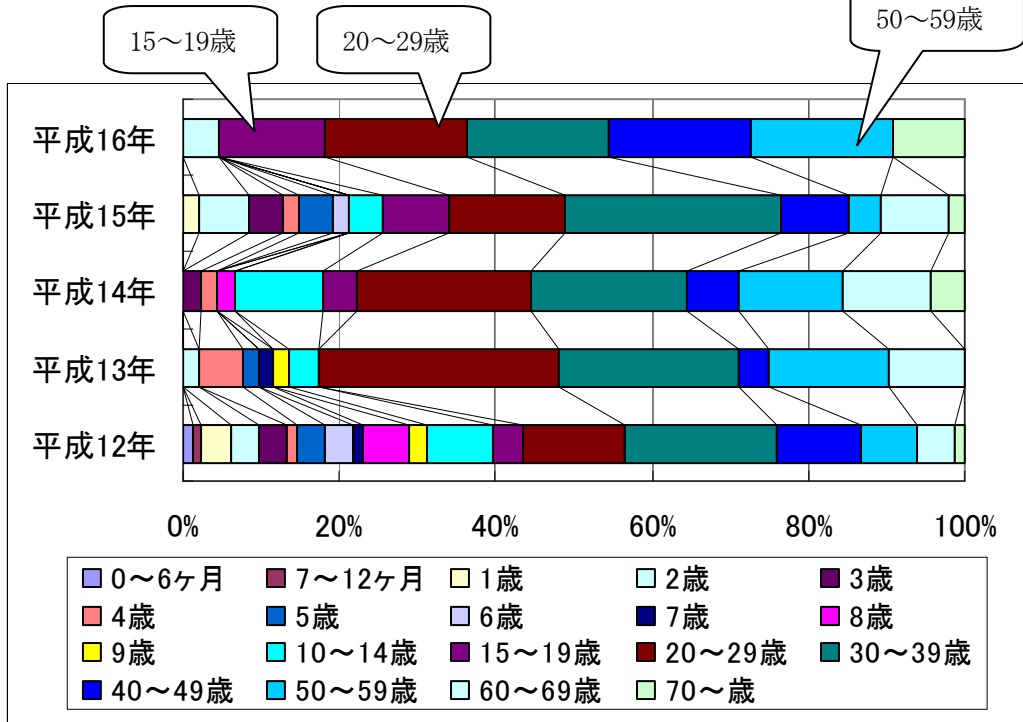


図18-2 急性出血性結膜炎の年齢階級別患者発生割合



(17) 流行性角結膜炎

流行性角結膜炎の定点あたり患者数は、平成13年以降はほぼ同程度で推移している。

1年を通じて患者が発生し、15～32週(4月上旬～8月上旬)がやや多い程度であった。

年齢階級別患者発生割合は、各年齢層で患者が発生しており例年と類似した傾向であったが、60～69歳、70歳以上の患者割合が増加傾向にある。

図19-1 流行性角結膜炎の週別定点あたり患者発生状況

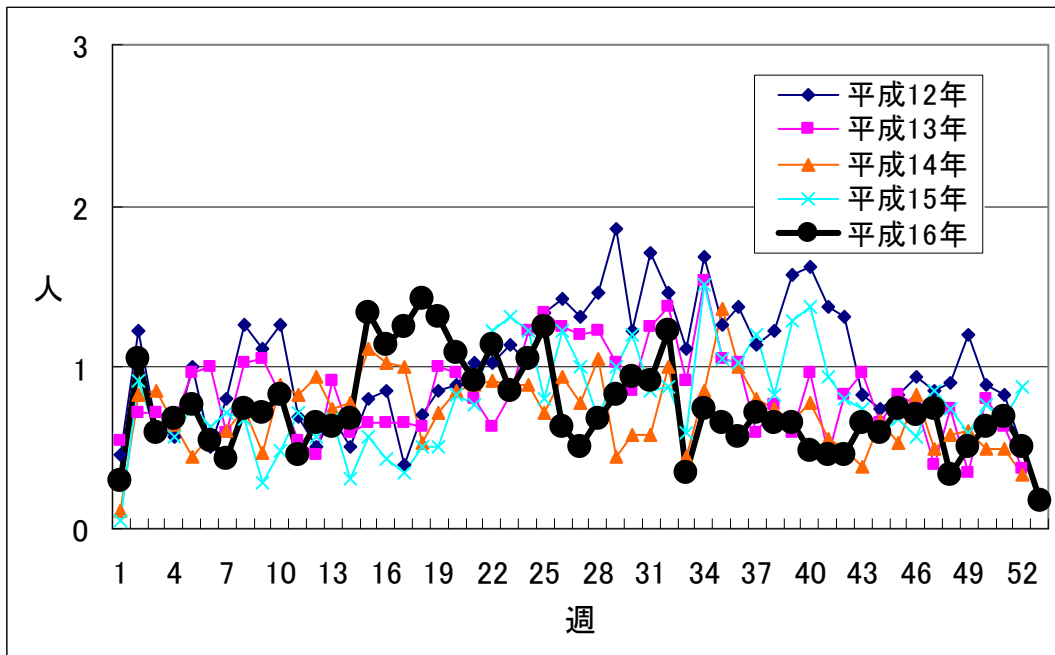
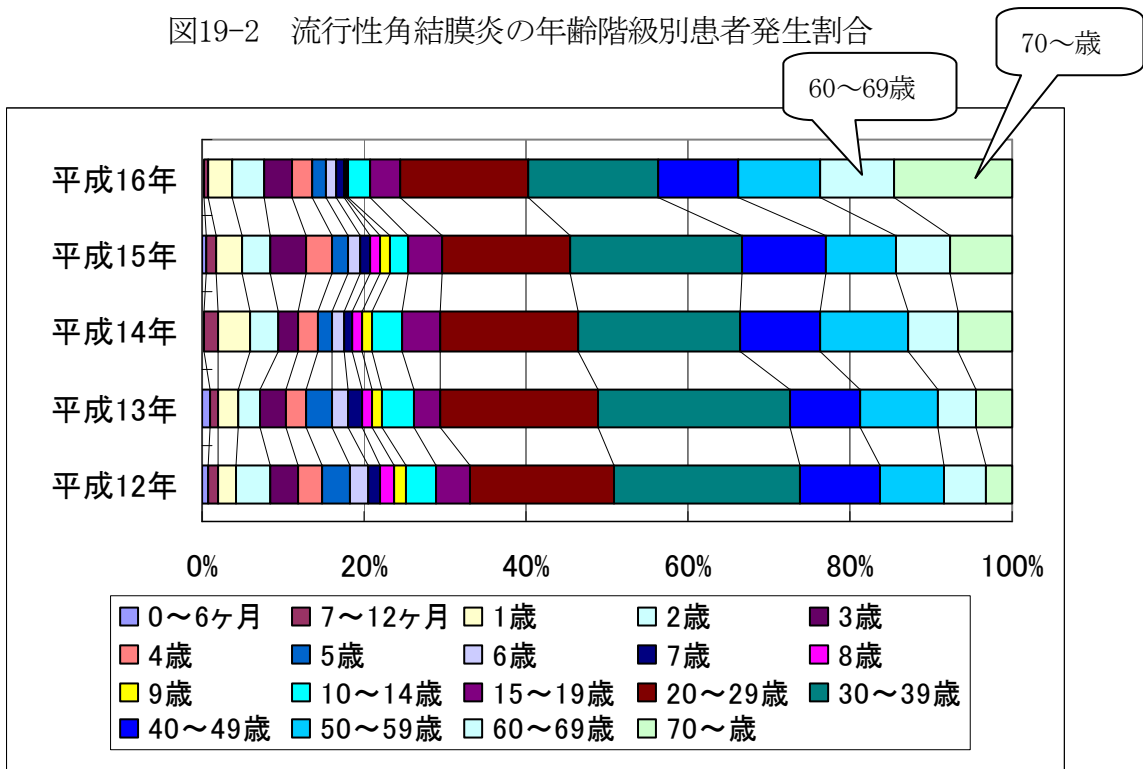


図19-2 流行性角結膜炎の年齢階級別患者発生割合



(18) 細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎は患者数が13名であった。

年齢階級別患者数は、0歳 4名、1～4歳 6名、5～9歳、10～14歳、70歳以上が各1名であった。

図20-1 細菌性髄膜炎の週別定点あたり患者発生状況

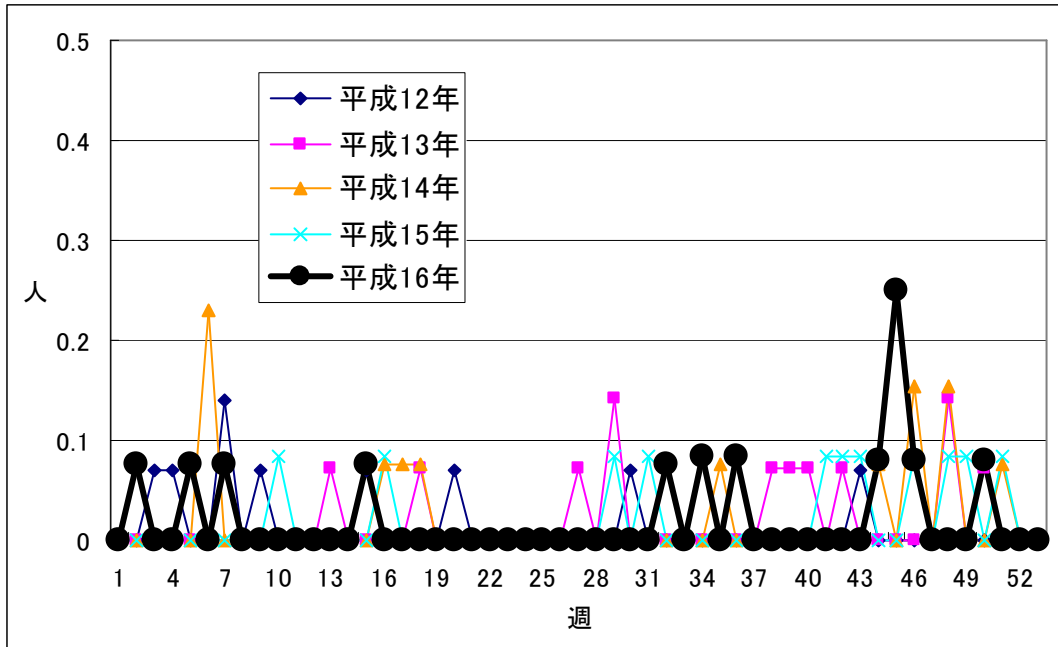
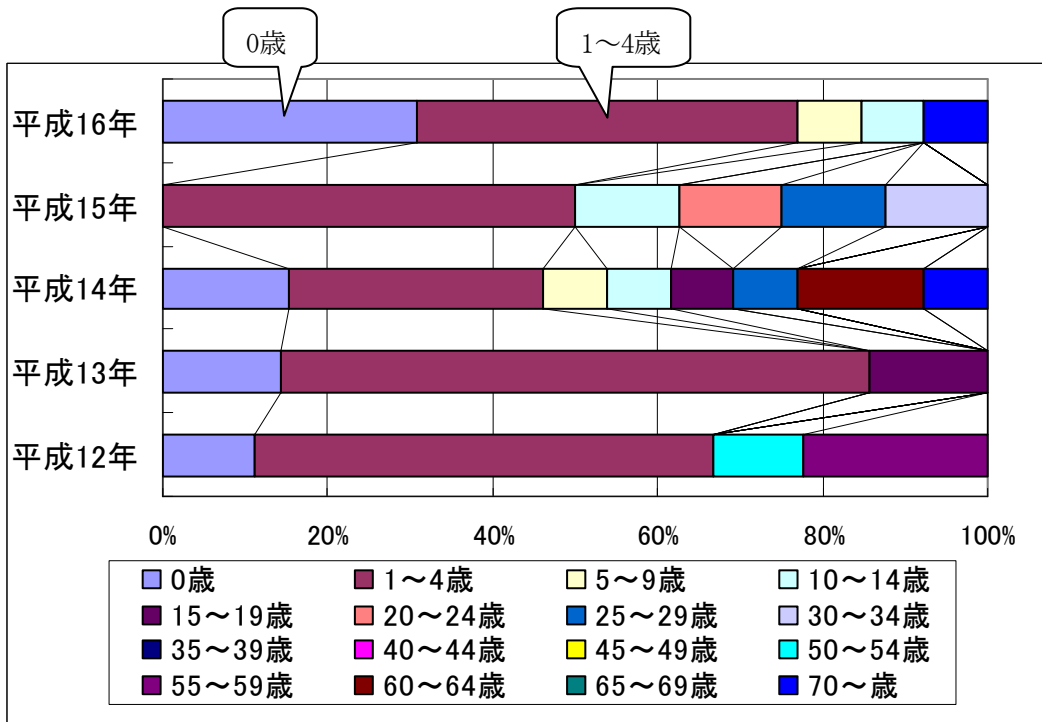


図20-2 細菌性髄膜炎の年齢階級別患者発生割合



(19) 無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎の患者数は平成14年の113名、平成15年の88名から大きく減少して26名となった。

季節的には27～44週(6月下旬～10月下旬)に患者報告がやや増加した。

ウイルスは、コクサッキーウイルスA4、A9が検出された。

年齢階級別患者発生割合は、5～9歳の患者が全体の38%、0～9歳の患者が全体の65%を占めた。

図21-1 無菌性髄膜炎の週別定点あたり患者発生状況

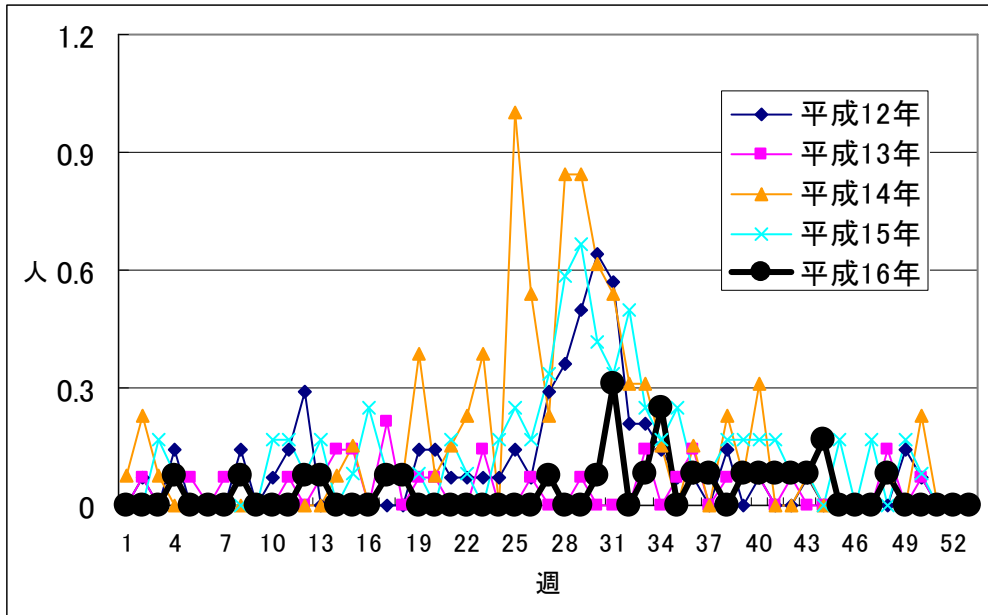
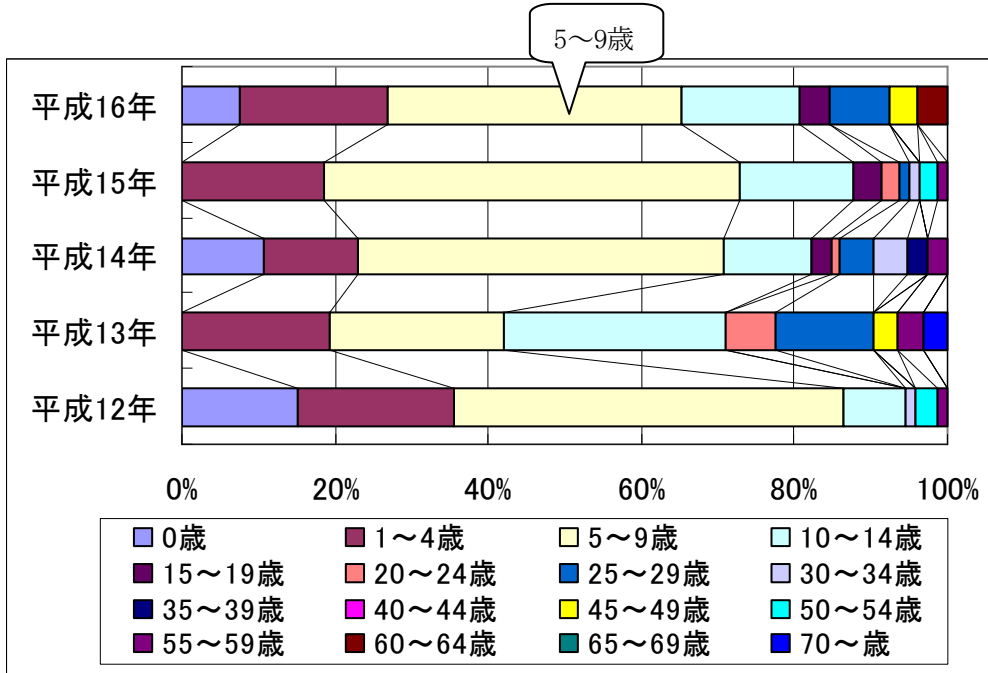


図21-2 無菌性髄膜炎の年齢階級別患者発生割合



(20) マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎の患者数は平成14年の111名、平成15年の81名より減少して55名となった。年間通じて発生した。

年齢階級別患者発生割合は、1～9歳で全体の85%を占め、1～14歳で全体の96%を占めた。

図22-1 マイコプラズマ肺炎の週別定点あたり患者発生状況

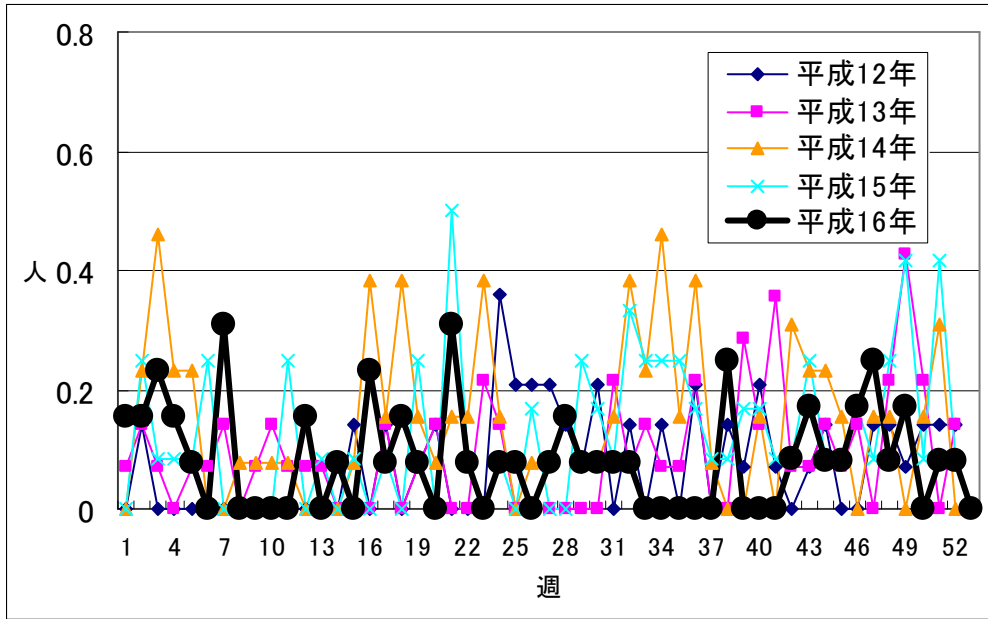
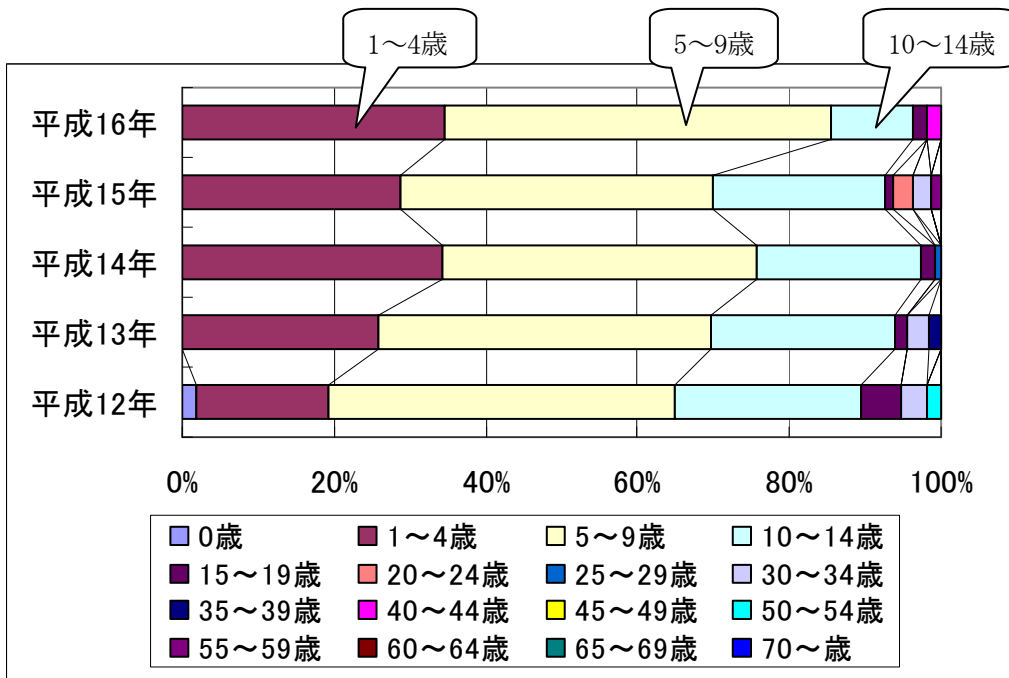


図22-2 マイコプラズマ肺炎の年齢階級別患者発生割合



(21) クラミジア肺炎（オウム病を除く）

クラミジア肺炎は第7週に1名発生し、年齢は65～69歳であった。

図23-1 クラミジア肺炎（オウム病を除く）の週別定点あたり患者発生状況

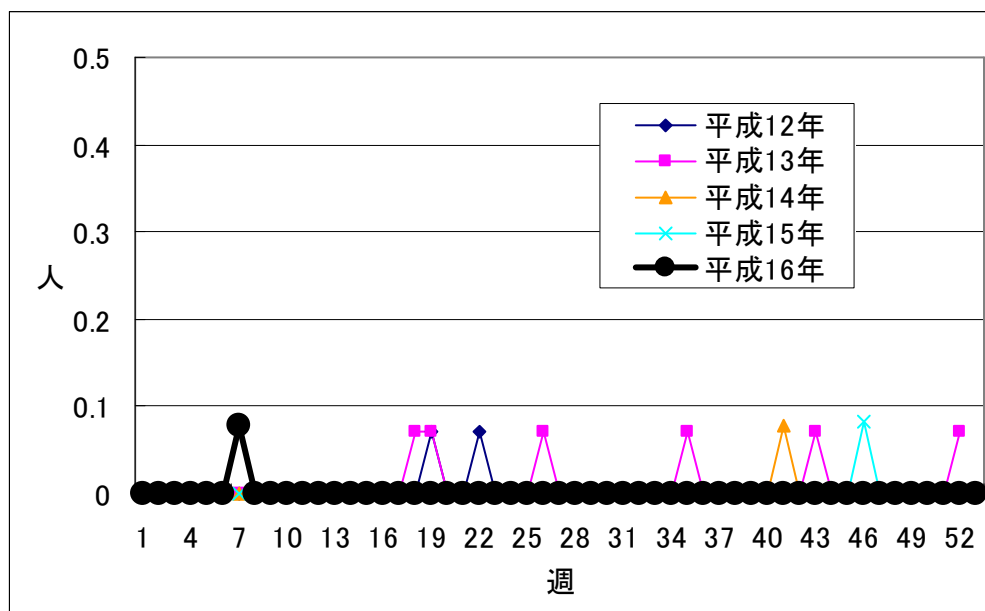
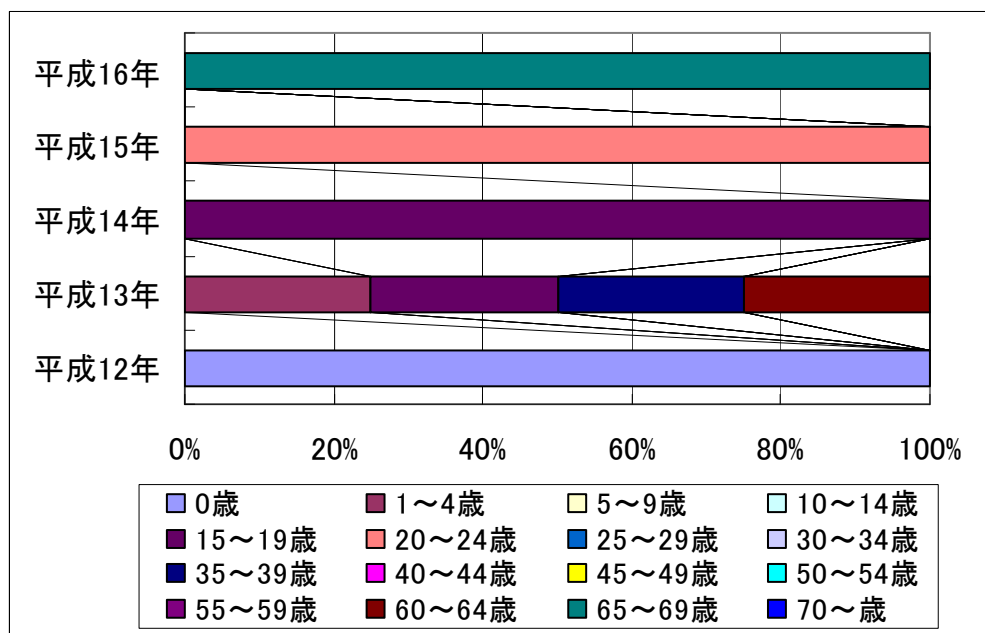


図23-2 クラミジア肺炎（オウム病を除く）の年齢階級別患者発生割合



(22) 成人麻しん

成人麻しんは6名の発生報告があった。

年齢階級は15～19歳 1名、20～24歳 1名、25～29歳 3名、50～54歳 1名であった。

図24-1 成人麻しんの週別定点あたり患者発生状況

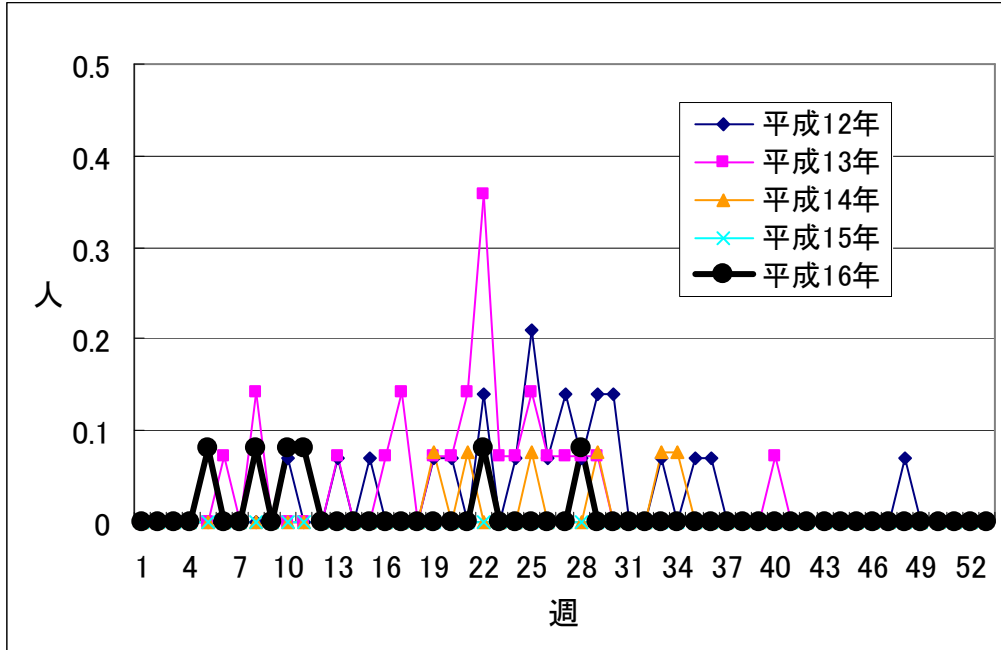
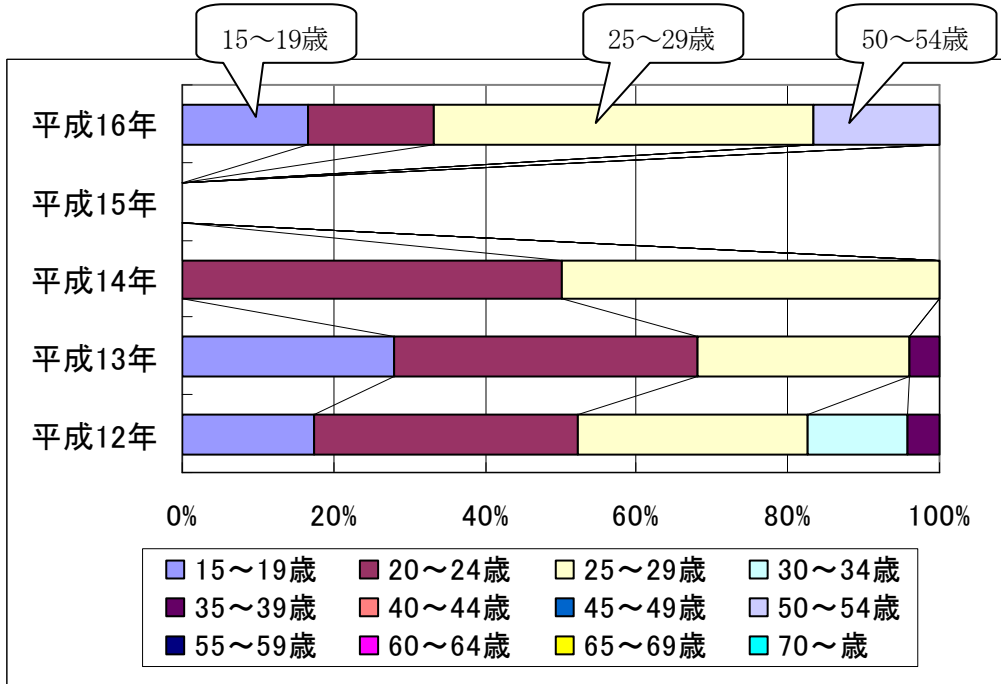


図24-2 成人麻しんの年齢階級別患者発生割合



(23) 性器クラミジア感染症

性器クラミジア感染症の定点あたり患者数は平成5年以降毎年増加し続けていたが、平成14年以降の定点あたり患者数は28人台となっている。

季節的な傾向は明確ではない。

性別患者発生割合は、男性が48%、女性52%となった。

年齢階級別患者発生割合は29歳以下で64%を占めた。特に女性では15～19歳の割合が25%、20～24歳の割合が37%と男性同(6%、20%)より高く、増加傾向にある。

図25-1 性器クラミジア感染症の月別定点あたり患者発生状況

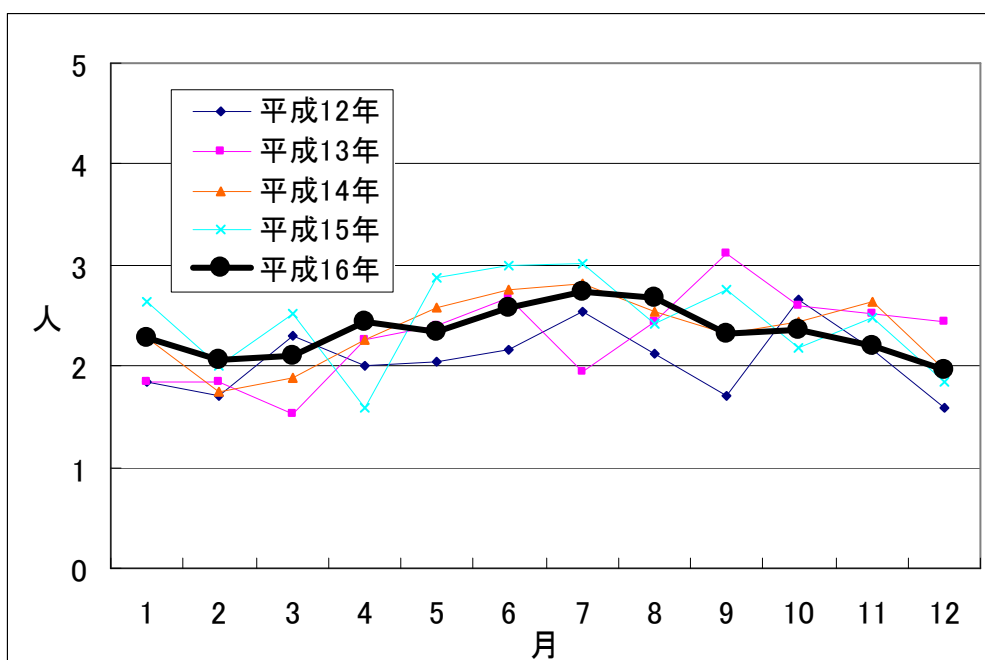


図25-2 性器クラミジア感染症の性別患者発生割合

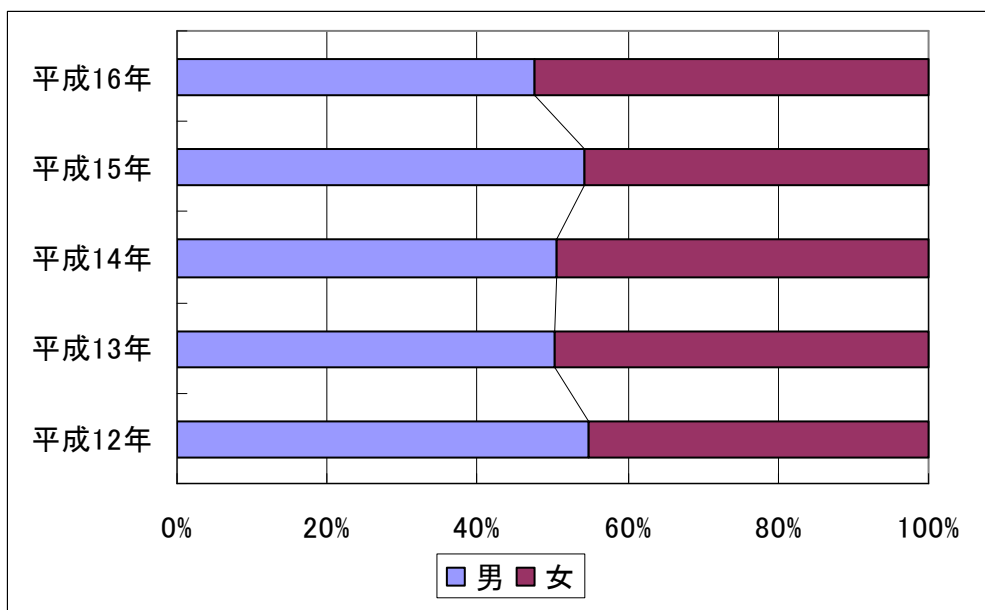


図25-3 性器クラミジア感染症の年齢階級別患者発生割合（男女合計）

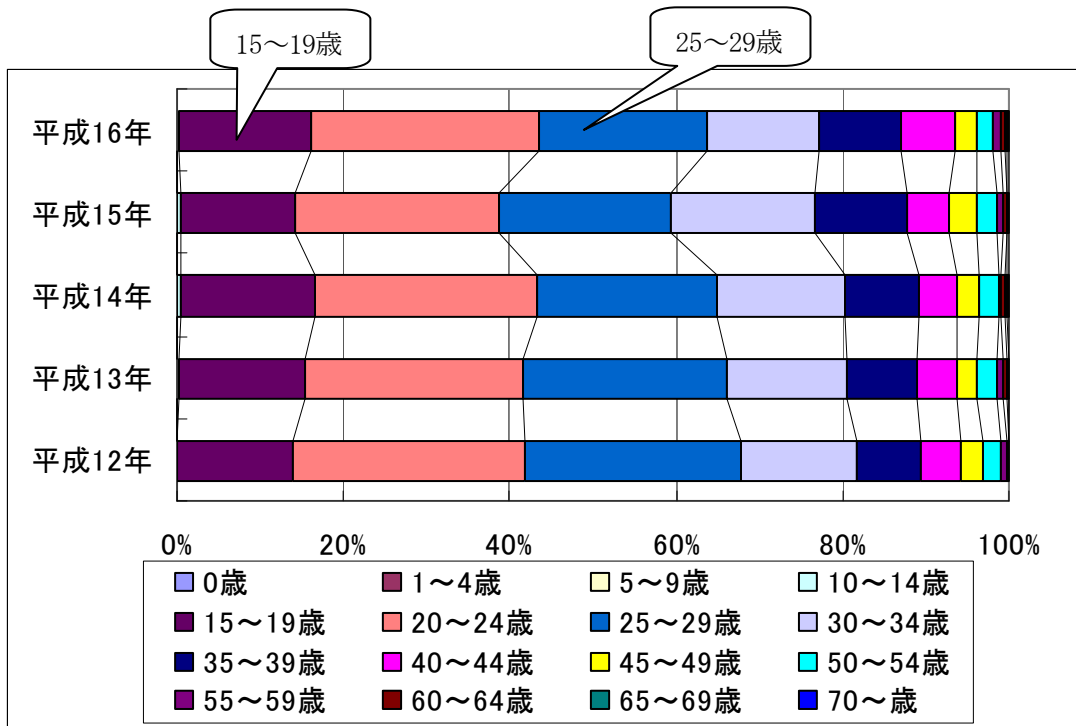


図25-4 性器クラミジア感染症の年齢階級別患者発生割合（男性）

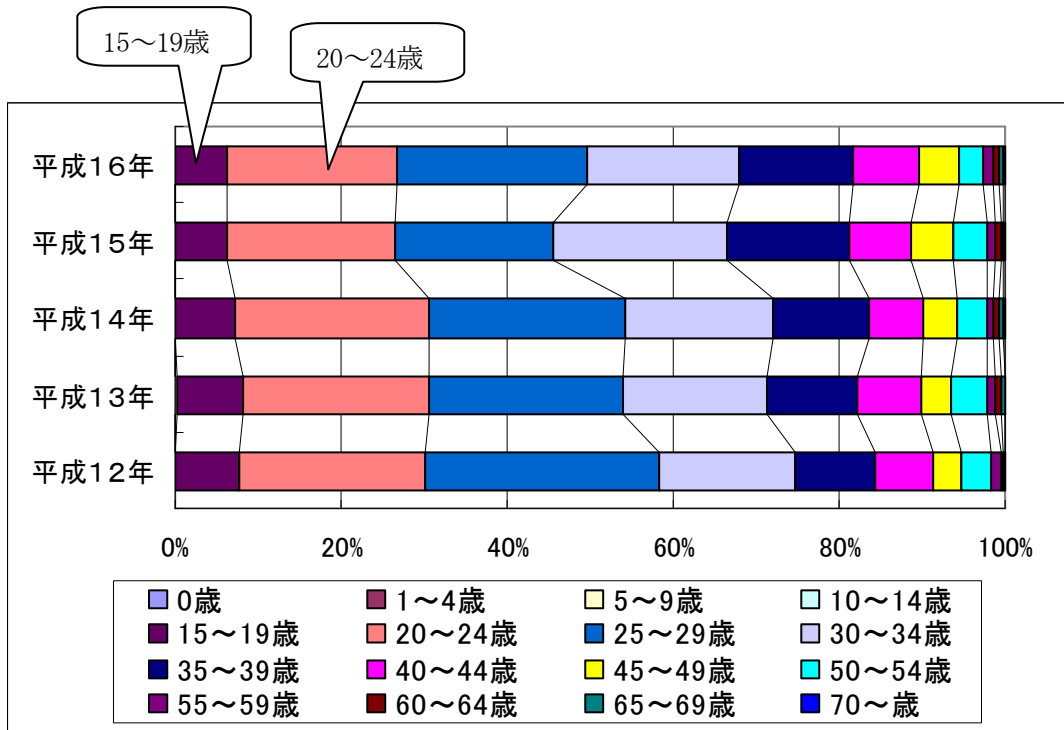
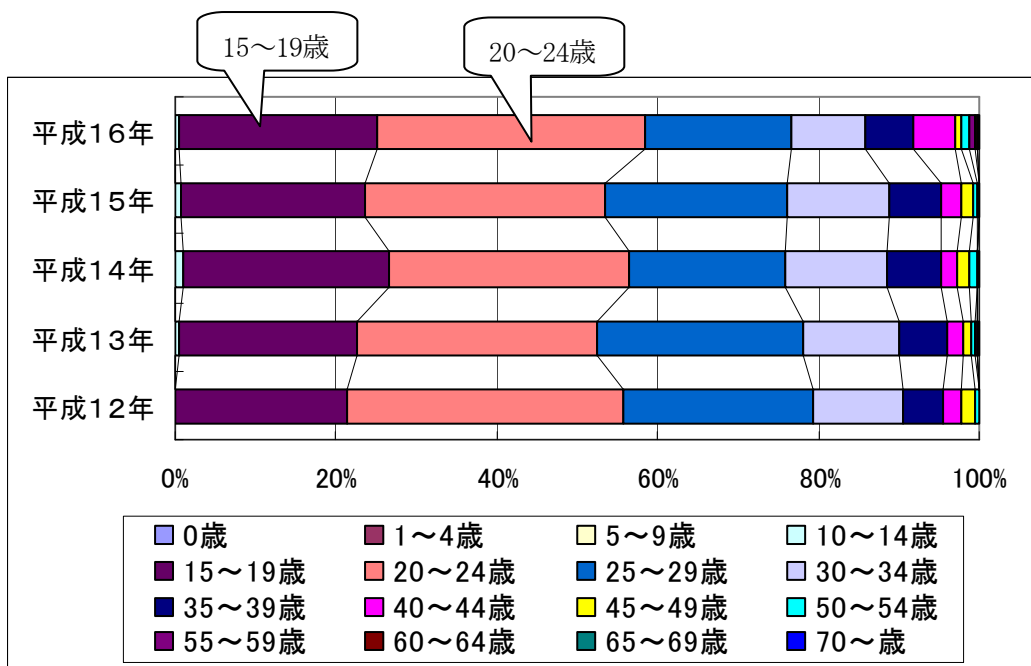


図25-5 性器クラミジア感染症の年齢階級別患者発生割合（女性）



(24) 性器ヘルペスウイルス感染症

性器ヘルペスウイルス感染症の定点あたり患者数は昨年よりやや増加した。

季節変動については特徴的な傾向はみられなかった。

性別患者発生割合は、女性の患者が全体の54%を占め、女性が男性より多い状態が続いている。

年齢階級別では15歳以上の各年齢層で患者の発生がみられたが、男性より女性の方が若年層の占める割合が高く、女性の20~24歳の患者割合の増加が目立った。

図26-1 性器ヘルペスウイルス感染症の月別定点あたり患者発生状況

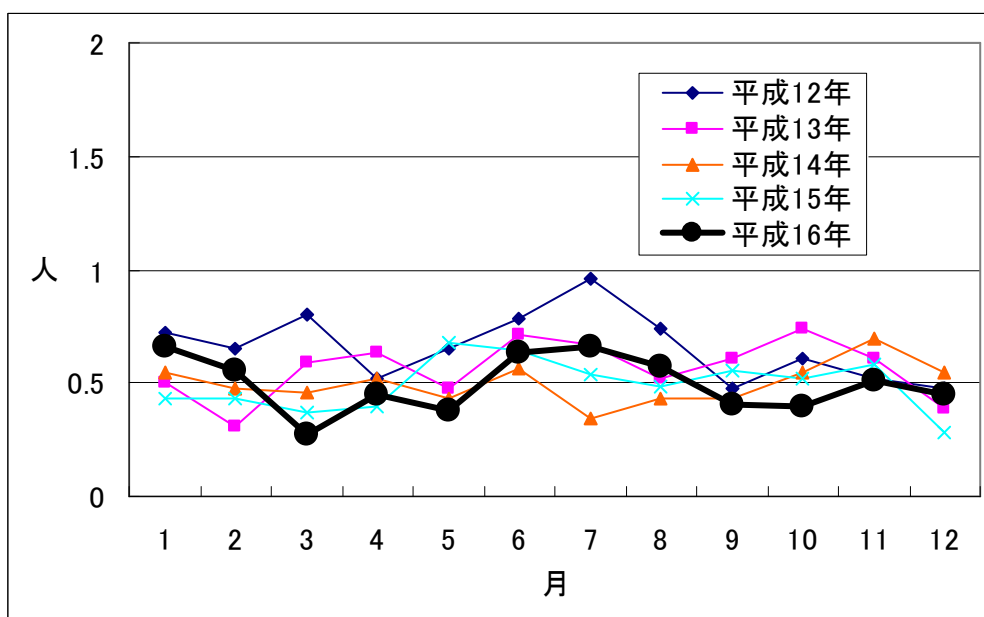


図26-2 性器ヘルペスウイルス感染症の性別患者発生割合

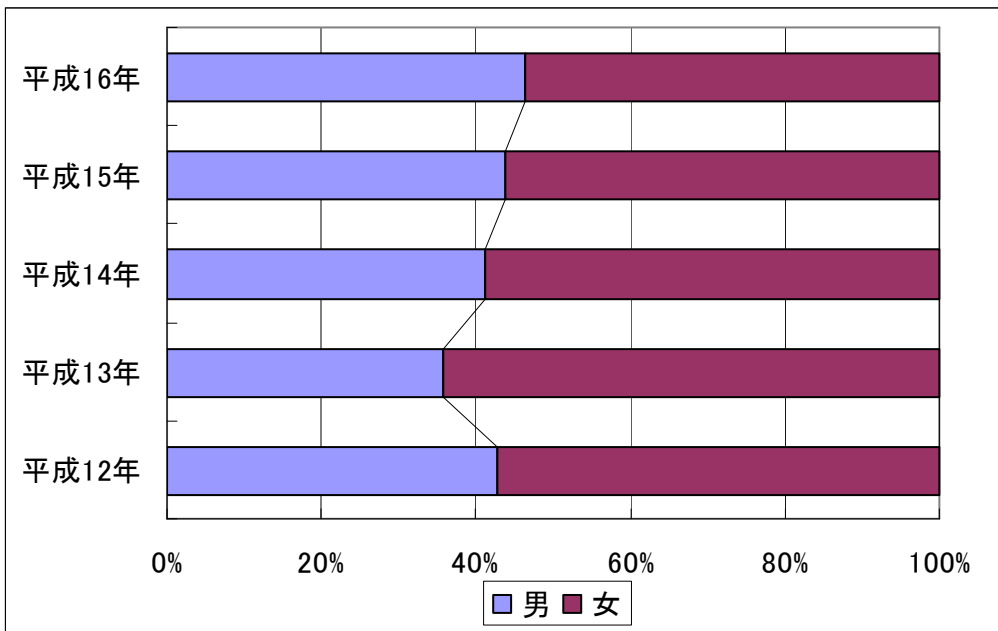


図26-3 性器ヘルペスウイルス感染症の年齢階級別患者発生割合（男女合計）

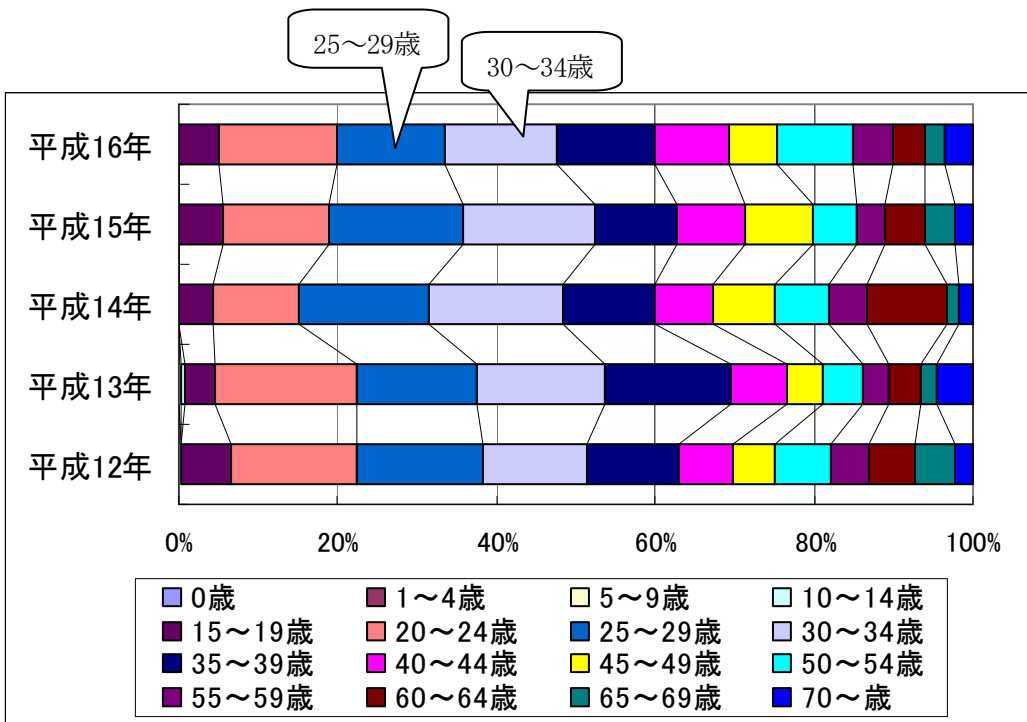


図26-4 性器ヘルペスウイルス感染症の年齢階級別患者発生割合（男性）

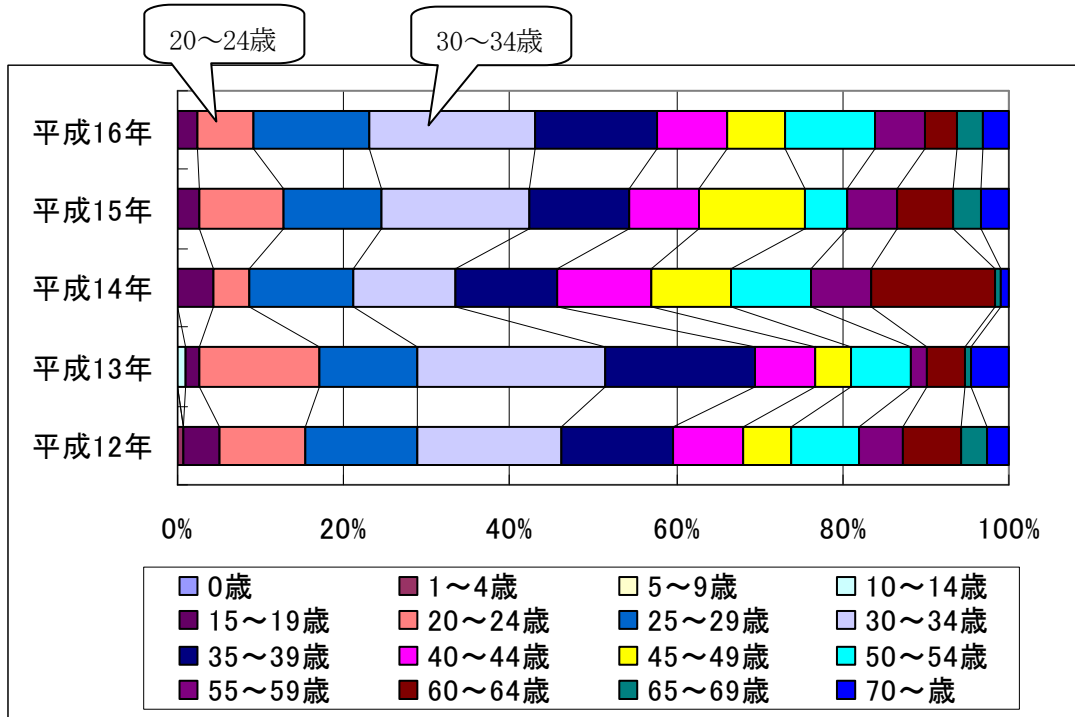
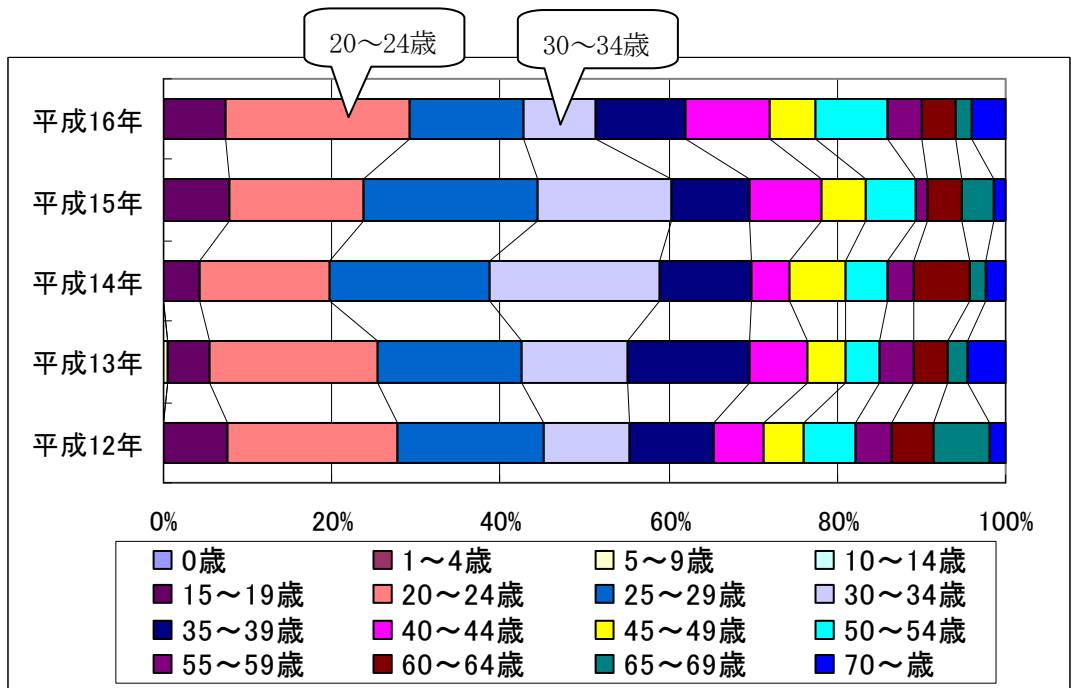


図26-5 性器ヘルペスウイルス感染症の年齢階級別患者発生割合（女性）



(25) 尖圭コンジローマ

尖圭コンジローマの定点あたり患者数は昨年より急増した。

季節変動はあまり大きくない。

性別患者発生割合は、男が全体の73%を占め、例年どおり男性の割合が多くなっている。

年齢階級別患者発生割合は、女性の15～19歳の割合が増加して24%を占めた。15～24歳で全体の69%を占めている。男女全体でみると例年と大きな変動はなかった。

図27-1 尖圭コンジローマの月別定点あたり患者発生状況

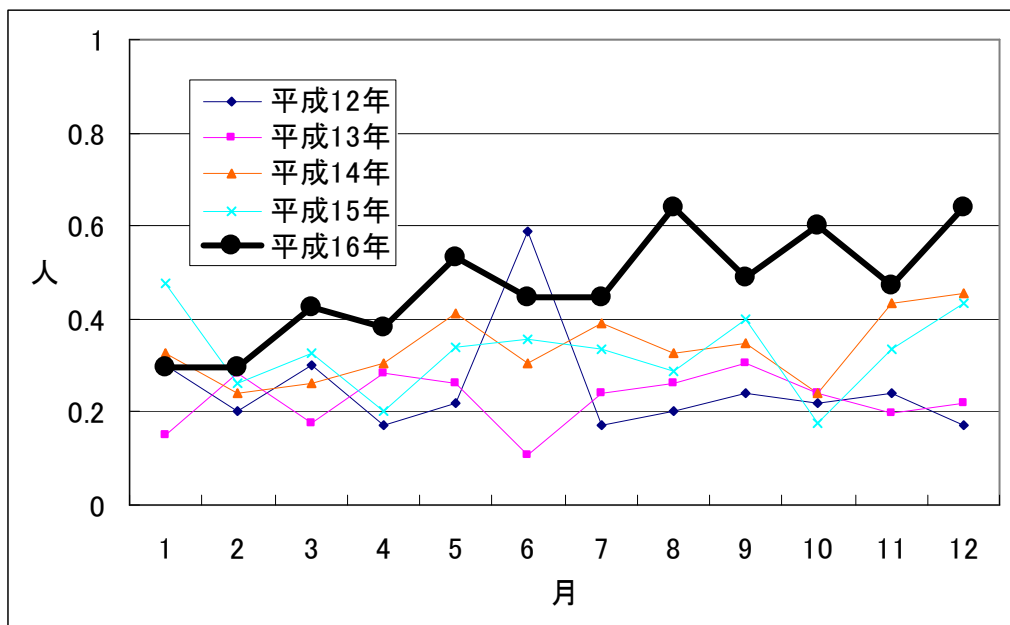


図27-2 尖圭コンジローマの性別患者発生割合

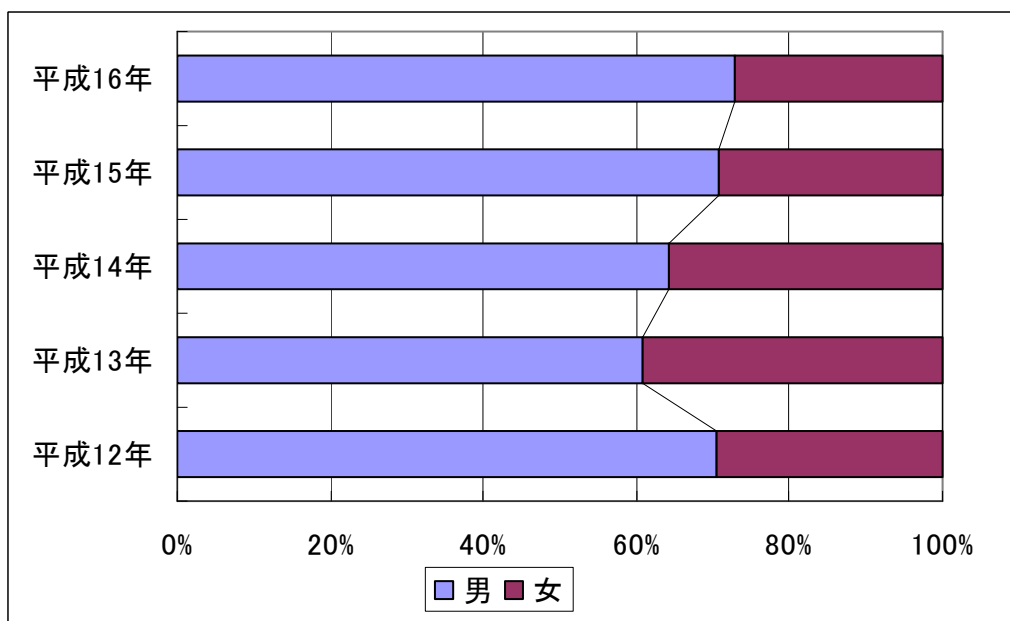


図27-3 尖圭コンジローマの年齢階級別患者発生割合（男女合計）

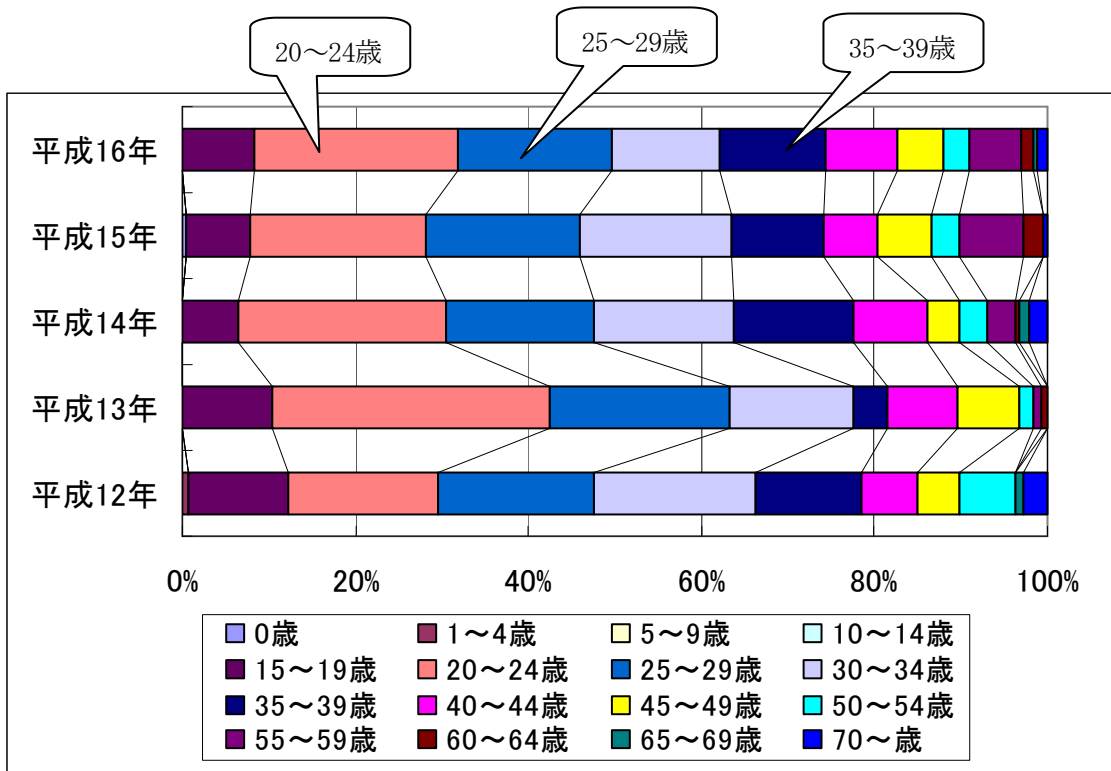


図27-4 尖圭コンジローマの年齢階級別患者発生割合（男性）

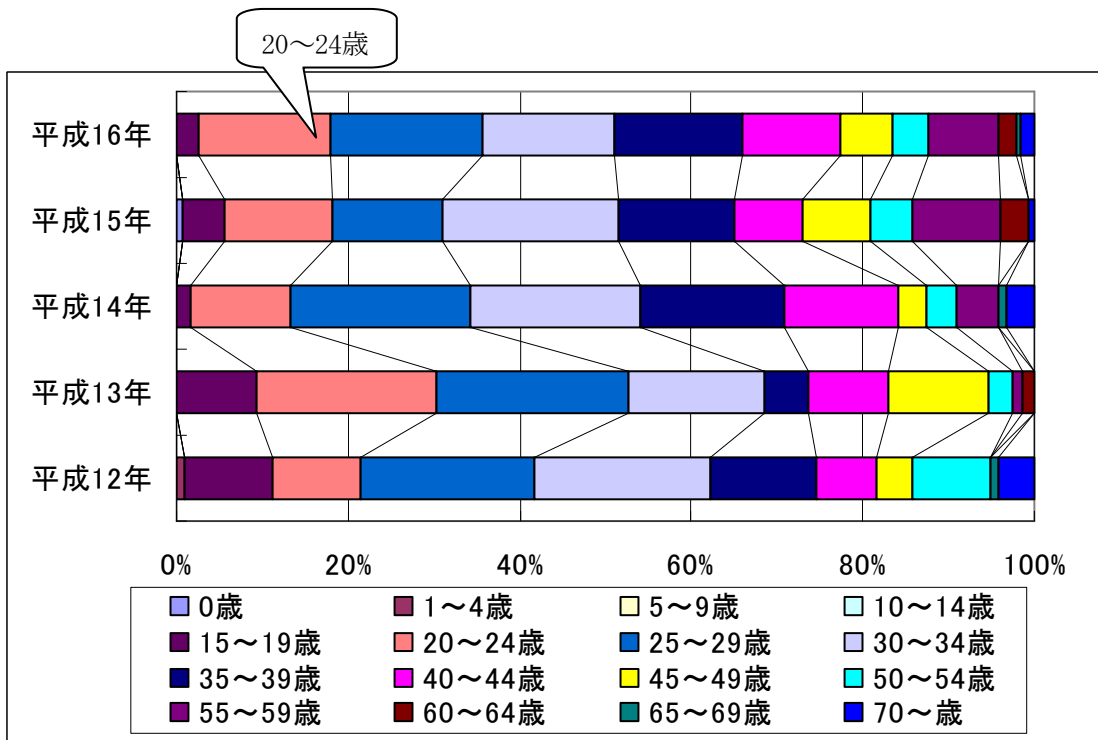
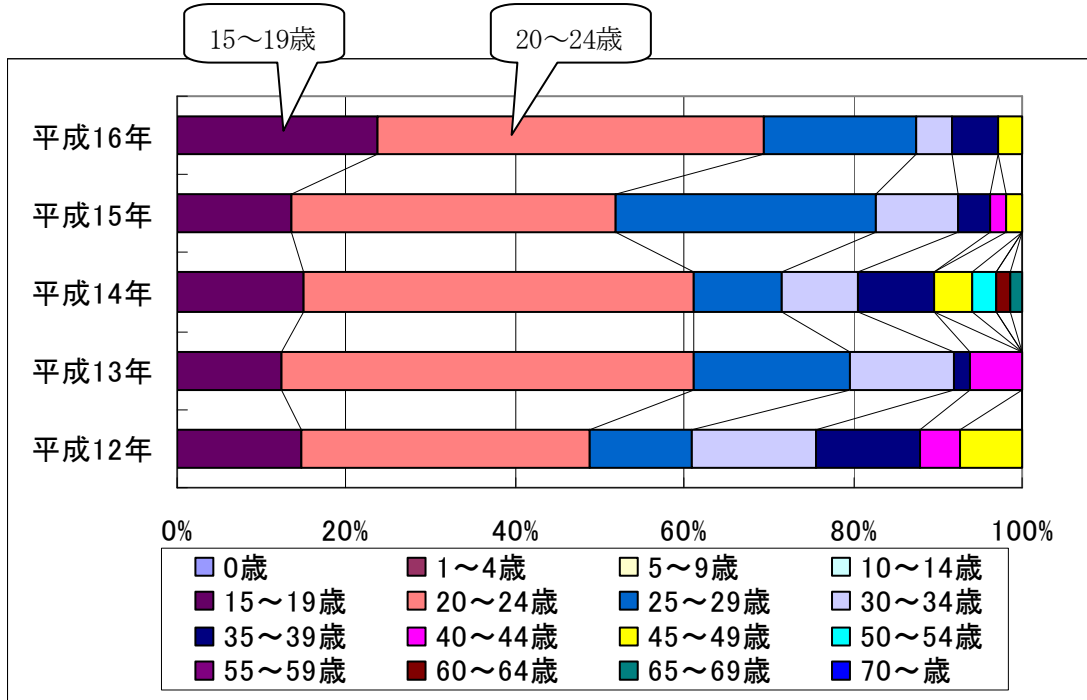


図27-5 尖圭コンジローマの年齢階級別患者発生割合（女性）



(26) 淋菌感染症

淋菌感染症の年間定点あたり患者数は12.48人で、過去5年間で最低となった。

性別患者発生割合は、男性が全体の87%を占め例年同様圧倒的に多かった。しかし徐々に女性患者の割合が増加している傾向にある。

年齢階級別患者発生割合は大きな変化はなく、20歳代の患者が全体の41%を占め、20~49歳で76%を占めた。

図28-1 淋菌感染症の月別定点あたり患者発生状況

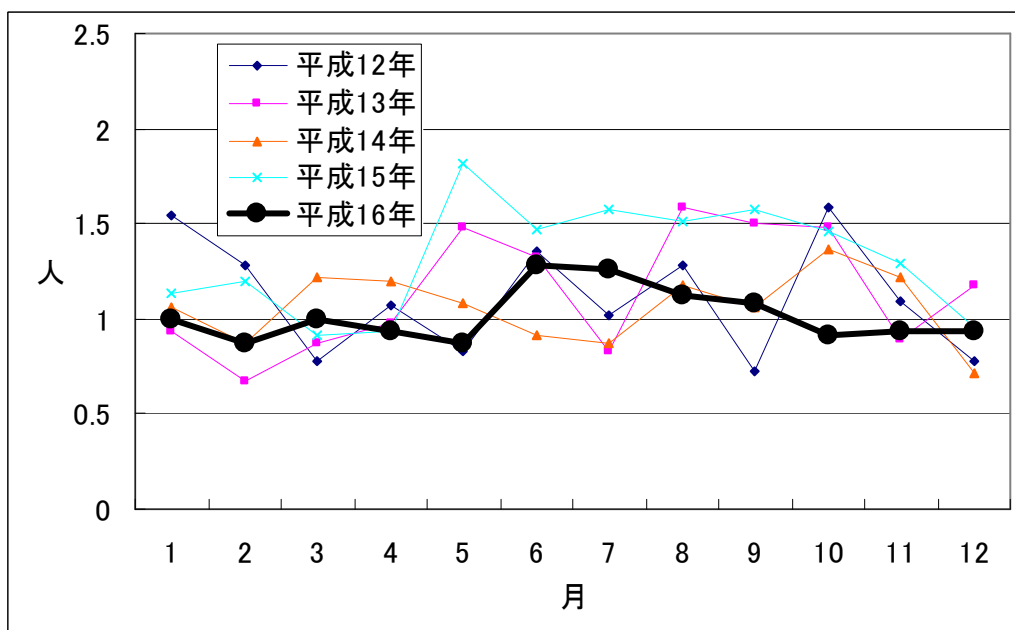


図28-2 淋菌感染症の性別患者発生割合

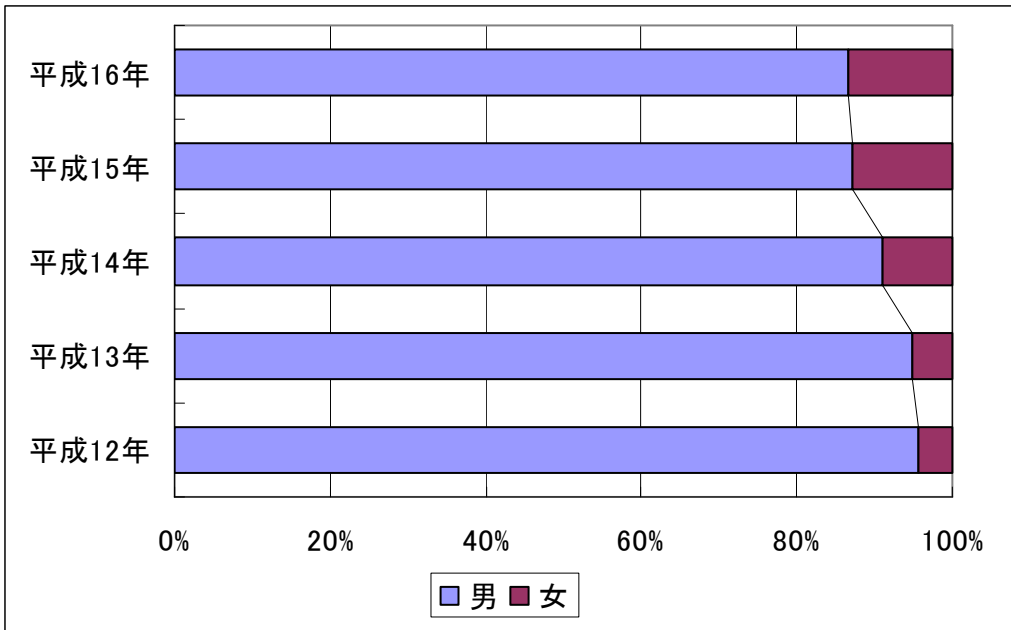


図28-3 淋菌感染症の年齢階級別患者発生割合（男女合計）

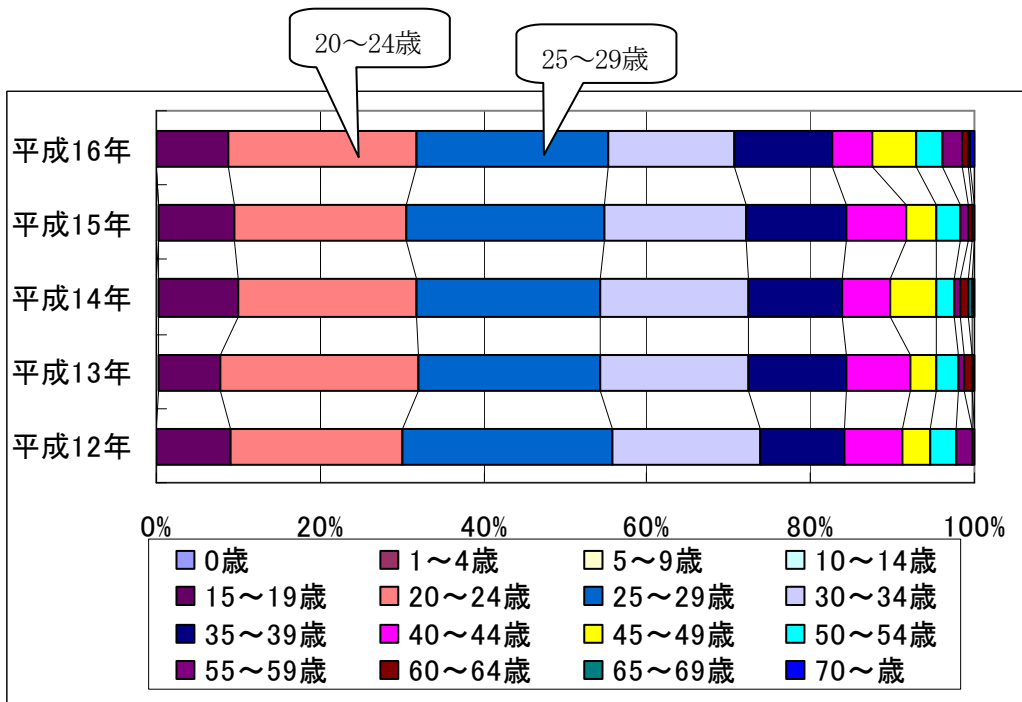


図28-4 淋菌感染症の年齢階級別患者発生割合（男性）

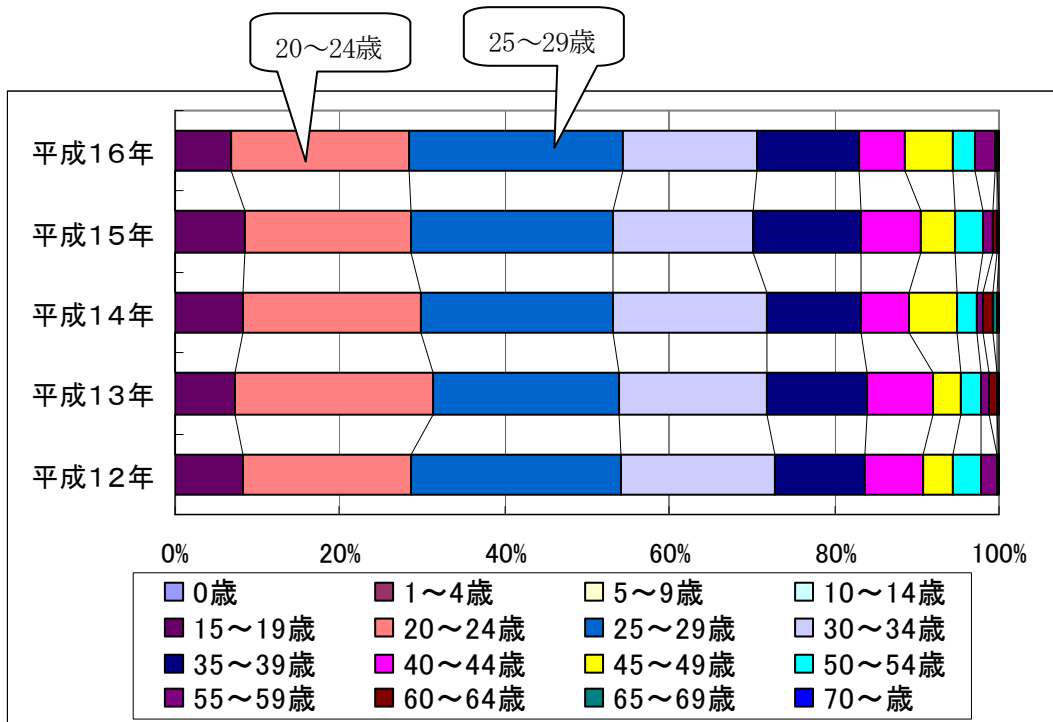
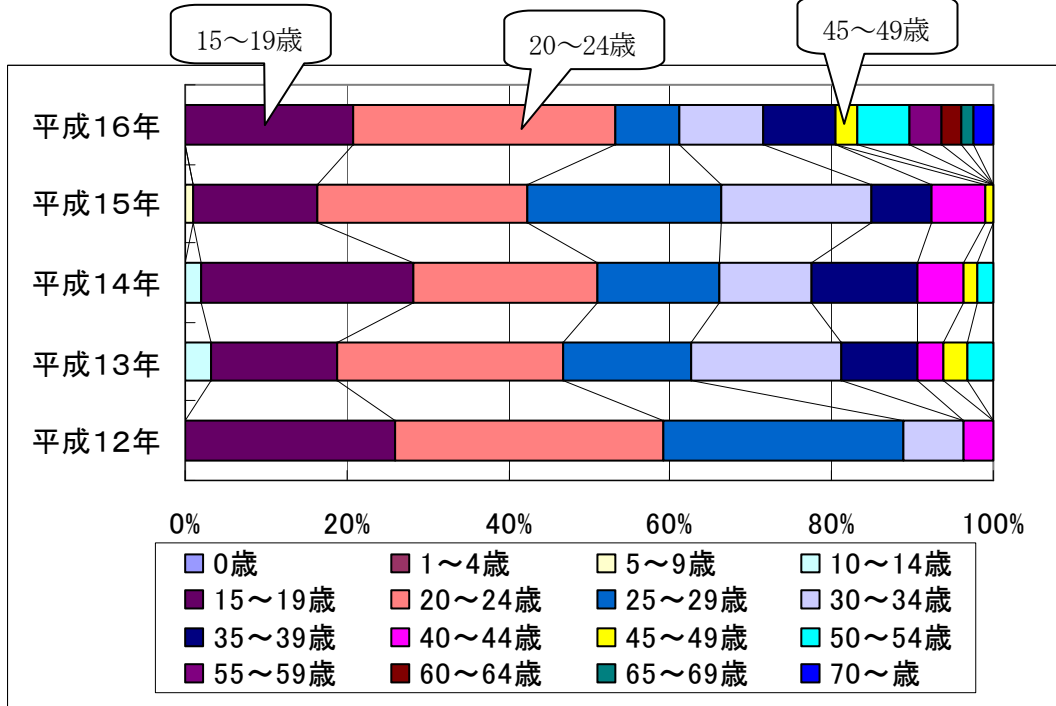


図28-5 淋菌感染症の年齢階級別患者発生割合（女性）



(27) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の定点あたり患者数は、昨年より増加した。毎月ほぼ一定の患者数の報告があった。

年齢階級別患者発生割合は例年と大きな変化はなく、70歳以上の高齢者が全体の61%を占め、60歳以上が全体の76%を占めた。

図29-1 メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の月別定点あたり患者発生状況

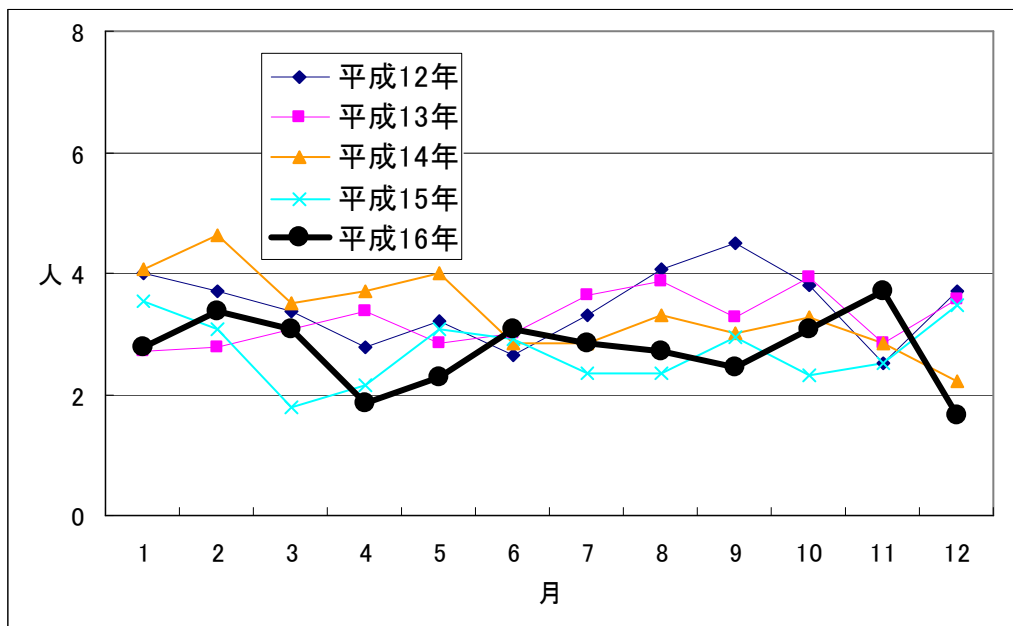
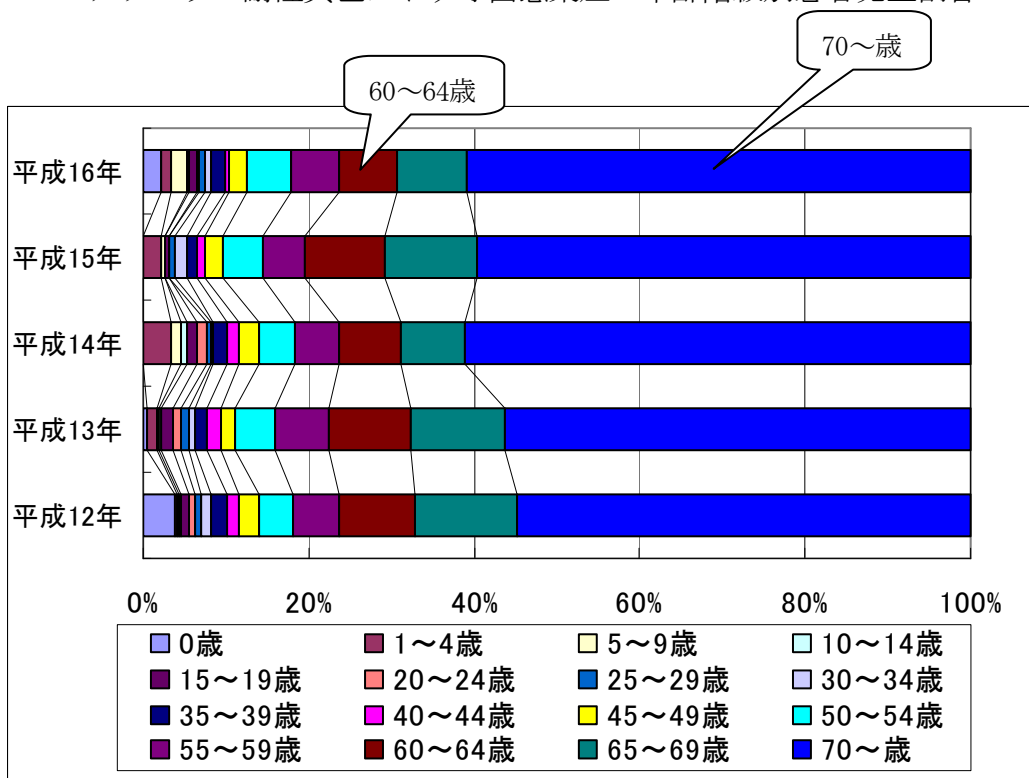


図29-2 メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の年齢階級別患者発生割合



(28) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の定点あたり患者数は3年連続減少した。

年齢階級別患者発生割合は、60歳以上が全体の60%となり、その中でも70歳以上が40%を占めた。9歳以下の小児の割合が減少している。

図30-1 ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の月別定点あたり患者発生状況

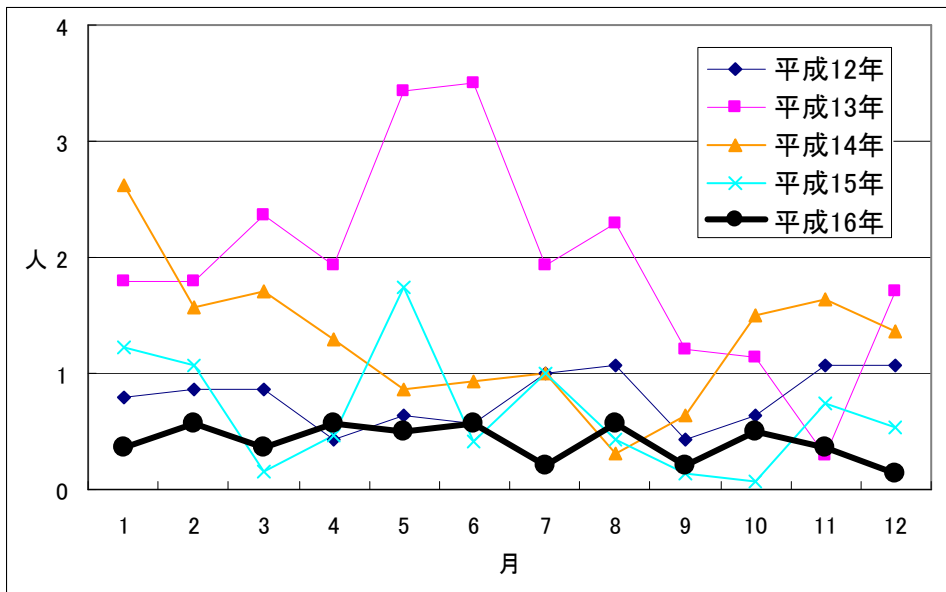
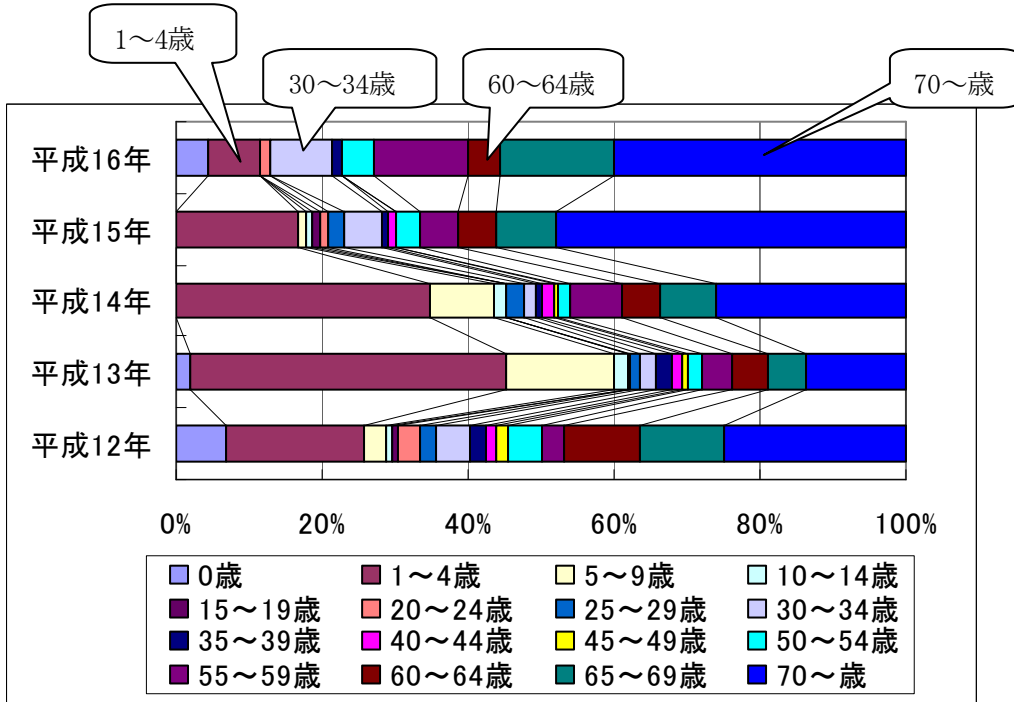


図30-2 ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年齢階級別患者発生割合



(29) 薬剤耐性緑膿菌感染症

薬剤耐性緑膿菌感染症は6名の患者報告があった。

年齢階級別患者数は、45～49歳が1名、65～69歳が1名、70歳以上4名であった。

図31-1 薬剤耐性緑膿菌感染症の月別定点あたり患者発生状況

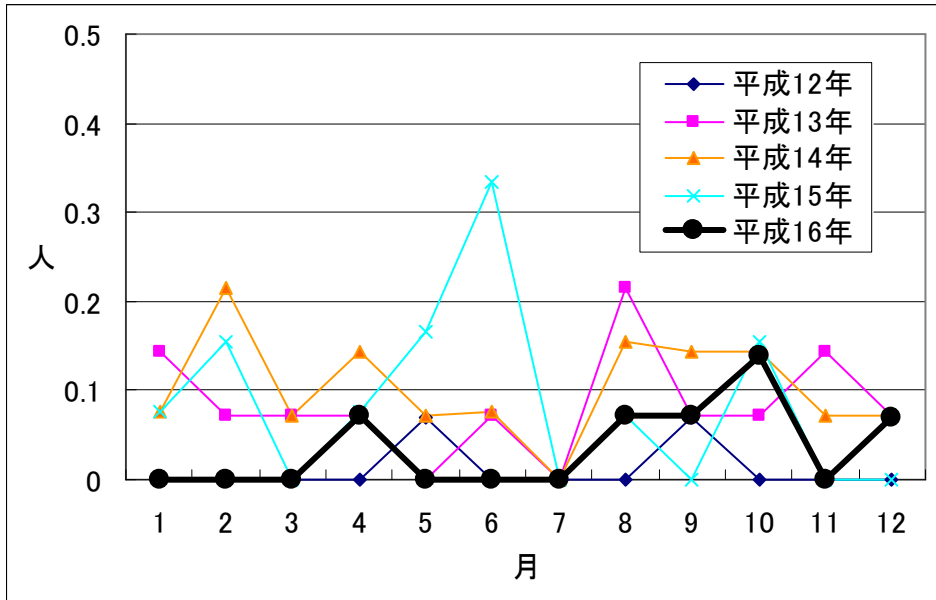


図31-2 薬剤耐性緑膿菌感染症の年齢階級別患者発生割合

